た　だ

舌音にして單子音の一つ。う音ふ音の前に來る時は轉じてトの發音と爲る事あり。たの濁音。

た　稻を植うる所。●田地。●水田。

だ　よそ。●ほか。●他人。●他所。●他方。●他事。

だ　古代尺度の名。手のひらを横にさしたる長さ。

た　誰(代)　たれに同じ。○「たが子」「音するはたぞ」

た　(助動)　たりの俗語。

だ　駄(名)　馬に附くる荷。

だ　攤(名)　古代遊戯の名。ぜにうちなどに似たる一種の勝負事。○往然「賽を取れば攤打たん事を思ふ」

だい　體(名)　〔一〕身體。●からだ。〔二〕物事の本部のところ。〔三〕文法上にて語尾に變化なく又てにをはにもあらぬ詞。●名詞。

たい　隊(名)　兵士の一組。

たい　對(名)　中古貴族の家の寢殿の左右又は後にある建物。姫君等家族の住む所。對の屋、東の對、西の對、北の對など稱ふ。寢殿と對との間に渡殿あり。……しんでんづくりの圖を見よ。

たゐ　田井(名)　田の水を貯へ置く處。●田。○萬葉「朝霧のたゐく田井に鳴く雁を」

たひィ　鯛(名)　魚の名。形鯖に似て大きく。色も味も最も美にして上品なるもの。

だい　題(名)　詩、歌、文、書物などの表題。

だい　臺(名)　〔一〕物を載するもの。〔二〕高きところにありてテーブルなどのやうに爲りたる平地。

だい　代(名)　〔一〕其人の世。●身代。●時代。●治世。〔二〕代理。●名代。●代人。〔三〕代價。●代料。●代金。

だい　大(名)　〔一〕大きなる事。〔二〕暦にては大の月。すなはち陰暦ならば三十日の月。陽暦ならば三十一日の月。〔三〕德川時代にては武士の帶ぶる刀。……小刀に對して。〔四〕能樂にては大皷(おほつづみ)。〔五〕鷹狩にては雌の鷹。

だい　第(形)　順序數の頭に添へていふ詞。○「第五號」

たいい 大意(名) 大體の主意。●大要。

だいゐどく 大威德(名) 五大明王の一つ。三面六臂。西方を鎭して一切の惡毒龍を摧き伏するもの。(佛教)

たいいん 退隱(名) 官を退きて隱居する事。△(動)—退隱す。

たいいんれき 大陰曆(名) 曆の一種。月の地球を一周する間を一箇月と定めたるもの。即ち明治五年以前の曆。

たいらう 大老(名) 德川幕府の役名。老中の首席にて政治の全權を握るもの。

たいろく 大祿(名) 澤山の祿高。●高祿。

たいろく 大錄(名) 攝政の異名。

だいろくてん 第六天(名) 佛教にて惡魔の住む天上世界の名。○謠曲「そも〳〵是は佛法を破却する。第六天の魔王とは我事なり」

たいは 大破(名) 大なる破損。

だいば 臺場(名) 大砲を据ゑて警衛する場所。●砲臺。●砲壘。

たいはい 體拜(名) 射禮の類の式を其道々の作法にて行ふ事。○「犬追物の體拜」「笠懸の體拜」

だいはちくるま 大八(名) 大なる荷車。

だいはかせ 大博士(名) 〔一〕明治初年の頃大學の教官。〔二〕博士中のすぐれたる人。

たいはく 太白(名) 〔一〕白き絹糸の太きもの。〔二〕砂糖の一種。雪の如く白きもの。〔三〕太白星の略。

太白星(名) 金星の一名。

たいはくせい 大半(副) 大方。●過半。●半分過。

たいはん 臺盤(名) 昔し食事する時に食器を載せ置く臺。今の食卓の類。

だいばんどころ 臺盤所(名) 〔一〕臺盤を取扱ふところ。●臺所。●勝手。〔二〕禁中にては女官の詰所。〔三〕大臣將軍などの夫人。●奥方。

だいに 大貳(名) 太宰府の次官。

だいにち 大日(名) 佛の名。日輪を司る如來。

だいにん 代人(名) 名代の人。●代理者。

たいほ 退步(名) 進步の反對。漸々と退く事。△(動)—退步す。

たいぼんげじょう 退凡下乘(句) 凡俗の人を退けて入るべからざらしめ。及び此より入る人は乘物より下らしむるの意。寺には此意味を示す

ために巫都婆を立つるなり。○平家「退凡下乘の巫都婆も苦のみむして傾きぬ」

たいほふッ　大法(名)　〔一〕國家の法律。●〔二〕其道の規律。

たいはうホ　大砲(名)　武器の名。据ゑ置きて擊つ鐵砲。●大筒。

だいはうりやううホリヤリヨ　大寶令(名)　文武天皇の大寶年中に制定せられたる法令。たゞ令(りやう)とも稱ふ。

たいぼく　大木(名)　大なる樹木。

たいへいらく　太平樂(名)　〔一〕雅樂の曲名。〔二〕氣樂なる事。

たいべつ　大別(名)　大體の區別。△(動)—大別す。

たいべつたうト　大別當(名)　院廳の長官。

たいへん　大變(名)　大なる事變。●大事。

だいべん　大辨(名)　太政官の官名。……べんを見よ。

たいと　泰斗(名)　泰山北斗の如く世人に仰がるゝ事。

たいとう　對等(名)　同等。●同資格。

たいたうト　帶刀(名)　刀を帶ぶる事。

だいだうド　大道(名)　廣き往來。●大通り。●本通り。

だいたうまいド　大唐米(名)　米の一種。あがごめ。

だいどうじド　大童子(名)　形の大なる童子。(宇治)

たいどく　胎毒(名)　小兒の病の名。胎內にて母體より受けたる病毒。

だいとく　大德(名)　德行の高大なる僧の尊稱。

たいとこ　大德(名)　だいとくに同じ。(雅)

だいどころ　臺所(名)　家にて食物など調製する處。●厨。

たいぢ　退治(名)　兇徒を攻め滅ぼして治世に返す事。△(動)—退治す。

だいぢ　大地(名)　地球。●土地。●地。

だいぢ　駄市(名)　牛馬の市。

たいちやうチヨウ　隊長(名)　現今の軍制にて其隊の長官。

だいちやうチヨウ　臺帳(名)　大元とする帳面。●元帳。

だいちやうチヨウ　大腸(名)　腸の下の部分。……上を小腸といふ。

だいぢやうぶヂヨウ　大丈夫(名)　ますらを。●ますらたけを。●大夫。●男子。

だいぢやうぶヂヨウ　大丈夫(名)　確實。●安全。●堅固。●安心。●萬全。●確固。●健全。●必然。△(形)—大丈夫な。(副)—大丈夫に。

たいぢん　對陣(名)　相對して陣取る事。△(動)—對陣す。

だいり 内裏(名) 皇居。●皇城。●御所。●禁裡。●禁中。●うち。●大うち。●大内裡。

だいり 代理(名) 其人に代りて事を處理すること。又は其人。●名代。

だいり 大理(名) 檢非違使別當の異名。

たいりゃうりょう 大量(名) 度量の廣き事。△(形)―大量なる。

だいれいりょう 代料(名) 代金。●代價。

だいりゃうりょう 大領(名) 古代郡吏の長官。大郡に之を置きて所部を撫養し郡領を檢察する事を掌らしむ。

たいりく 大陸(名) 大なる陸地。

たいりゃく 大略(副) 大抵。●大概。●大要。●概略。

だいりき 大力(名) 他より秀でたる力量。

だいりびな 内裡雛(名) 高貴男女の二體を造りたる雛人形。男體は束帶にて女體は天冠に十二一重を着服す。

だいりせき 大理石(名) 石の名。彫刻又は裝飾等に用ふる石灰質のもの。

だいおん 大音(名) 大なる音聲。●大聲。○謠曲「大音あげてぞ呼ばゝりける」

だいおんじゃうじょう 大音聲(名) 大音に同じ。

だいわうわう 大黄(名) 草の名。夏の頃綠色の小さき花さくもの。根を藥用とす。

たいわ 對話(名) 向ひ合にてする談話。△(動)―對話す。

たいか 大家(名)(一)富貴の家。(二)學問、又は藝術に堪能なる人。

たいか 大厦(名) 大なる家。

だいか 代價(名) 價。●代料。●代金。

たいがい 大概(副) 大抵。●大凡。●大略。●概略。

だいかい 大海(名) 大なる海。●荒海。●大洋。

たいがん 對顏(名) 對面。

たいかん 大寒(名) 曆の詞。二十四氣の一つ。

たいかく 體格(名) 身體の形づくり。

たいがく 退學(名) 學校を退く事。●退校。△(動)―退學す。

だいがく 大學(名) (一)最上の高等教育。(二)大學校。(三)中古の制。京都に置きて百官子弟を入學せしめたる學校。……地方には國學あり。

だいがくれうりょう 大學寮(名) 中古の制。式部省の附屬にて五位以上官吏子弟の教育を掌る役所。

卒業すれば撰擧法ありて式部省之を試驗し及第したるものは奏上して任官するの定めなり。官吏は頭、助、允、屬の四等とし。學科の部門は紀傳、明經、明法、算道の四ありて教官は博士、助教、直講の三等なり。

だいかぐら 太神樂(名) 品玉、獅子舞など演する一種の技藝。

だいがくッかう 大學校(名) 最上の高等學校。

だいがさ 臺傘(名) 德川時代。公卿大名の行列に袋に入れ長柄を附けて持たせたる官笠。又は塗笠。〔圖〕

だいがくしゃ 大學者(名) 學者中の大家。

たいよ 貸與(名) 貸し與ふる事。△(動)—貸與す。

たいやう 太湯(名) 日。●日輪。

たいやう 大洋(名) 陸に遠き茫海。●外洋。

たいえう 大要(名) 必要なる事の大體。●大概。●概要。

たいやうれき 太陽曆(名) 曆の一種。一年を三百六十五日と定めて四年毎に一日の閏を置き明治五年以來我國に行はるゝもの。

たいだ 怠惰(名) おこたり。●なまけ。△(形)—怠惰なる。(副)—怠惰に。

だいたい 大隊(名) 現今の軍制。數中隊を集めたるを一大隊といふ。

だいたい 大體(副) 總體。●大略。●大凡。●大要。

だいだい 橙(名) 木の名。其實は蜜柑に似て大きく赤く正月の飾りに用ふるもの。又其皮は藥に用ひて橙皮といふ。

だいだい 代代(名) おの〳〵の代。

だいだい 代代(副) 代毎に。●何の代も。

だいだいり 大内裡(名) 京都の皇居。●御所。●内裏。

だいだいかぐら 太太神樂(名) 伊勢大神宮にて行はる〻一種の神樂。

たいだいし 怠怠(形。形狀言シク活) あるまじき事なり。●懈怠な。●以ての外な。●不注意。○源氏「世の中の事を思し捨てたるやうになりゆくは。いとたいだいしき事なり」

たいだん 對談(名) 相對してする談話。△(動)—對談す。

だいたん 大膽(名) 膽の大なる事。●物事に動ぜぬ事。△(形)—大膽なる。(副)—大膽に。

たいたう タイトウと發音する詞はたいとの處にあり。

たいれい 大禮(名) 人生中重大なる儀式。冠、婚、葬、祭等。

たいそう (名) 大事。●大げさ。●仰山。△(形)—たいそうな。(副)—たいそうに。(俗)

たいさッう 體操(名) 體育上の規則立ちたる運動法。

たいざうかい 胎藏界(名) 眞言宗にて云ふ一種の想像世界。

だいさッうけい 大早計(名) はやまりすぐる事。

だいそうじゃう 大僧正(名) 僧正の最高位。

だいづ 大豆(名) 豆の一種にして莢丸く花白く實は味噌、醬油、豆腐などに造るもの。

たいない 胎内(名) 腹の中。

だいなる 大なる(形) おほいなる。

だいなん 大難(名) 大なる災難。

だいなごん 大納言(名) 太政官の次官。おほいものまうすつかさとも云ふ。●亞相。

だいなし (名) 無用のものとなりはつる事。●めちゃくちゃ。●わや。△(形)—だいなしの。(副)—だいなしに。

たひィら 平(名) 高低のなき事。●平面。●平等。●平均。△(形)—平なる。(副)—平に。

たひィらか 平(名) (一)たひらに同じ。(二)平穩。●無事。●泰平。△(形)—平かなる。(副)—平かに。

たいらん 臺覽(名) 大臣將軍の御覽になる事。

たひィらぐ 平(他動下二段) 平らかにする。●平定する。●鎭撫する。●ほろぼす。

たひィらぐ 平(自動四段) 平らかになる。●治まる。●鎭まる。

たひィらけし 平(形。形狀言ク活) 平らかなる有樣。

たいらぎ 蛾。蜻蛉(名) 貝の名。一名烏帽子貝。

たひィらぎ 平(名) 和睦。●平和。●和親。

たいう 大雨(名) おほあめ。

たいふッ 大夫(名) (一)職の長官。大方はダイブと稱ふれども皇太后宮大夫はタイフと稱ふ。(二)五位の異名。(三)神主。(四)能役者の座長。(五)淨瑠璃語以下諸藝人。(六)遊女。……◎神主以下は古へ禁中に召さるゝ時など假に五位に準ぜられたるに因る。

たいふッ 大輔(名) 古代の官名。省の次官。此下に少輔

だいく　大工(名)　家を造る工人。(対)木工。

たいくわうだいぐう　太皇太后(名)　天皇の御祖母。

だいくわん　代官(名)　德川時代。直接に人民を支配して租税の取立、人別の調査などする役人。

だいぐわん　大願(名)　神佛に對して立つる誓願。

だいぐれん　大紅蓮(名)　地獄の一つ。氷に閉ぢられ皮膚分裂する苦を受くる處。(佛教)

たいくつ　退屈(名)　爲すべき事なくして困却する事。(同)無聊。(同)徒然。△(動)—退屈す。

たいぐん　大軍(名)　大勢の軍兵。

たいくう　大空(名)　おほそら。

たいぐう　待遇(名)　あしらひ。(同)もてなし。(対)取扱。

たいや　逮夜(名)　佛葬祭にて忌日の前夜をいふ。

たいやく　大役(名)　重大なる役目。(同)大任。

たいやく　大厄(名)　大なる災難。

たいやくのまつり　大厄祭(名)　昔し禁中にて毎月行はれたる災難除の祭。

たいまい　玳瑁(名)　海龜の一種。熱地の海に產するもの。其甲を鼈甲といふ。

たいまい　大枚(名)　莫大の金錢。○「大枚五十兩」

たいまつ　松明(名)　燒松(たきまつ)の音便。◎松の割木を束ね火を點して明を取るもの。單にまつとのみも云ふ。(他動四段。又助動)　たてまつるに同じ。○土佐「幣たいまつる」

たいまつる

たいまん　怠慢(名)　怠る事。(対)怠惰。(同)懶惰。△(形)—怠慢なる。(副)—怠慢に。

たいけ　大家(名)　富貴の家。

たいけ　台家(名)　〔一〕攝政關白の家柄。〔二〕天台宗。

たいけ　帶下(名)　病の名。=腰氣(こしけ)。

たいけい　大慶(名)　大よろこび。(対)めでたき事。

たいけつ　對決(名)　裁判にいふ詞。双方呼出し相對せしめて審判する事。(同)對審。

たいけん　大權(名)　政治の全權。

たいけん　大言(名)　大口。(同)放言。(同)高言。△(動)—大言す。

たいけん　體言(名)　文法上にて語尾の變化せず。又てにをはにもあらぬ詞の稱。(同)ぬことば。(対)名詞。

だいげん　代言(名)　訴訟の本人に代りて辨白する事。又は其人。

だいげんにん 代言人(名) 代言を業とする人。近頃改めて辯護士といふ。

だいげんほふ 大元法(名) 佛に對してする祈禱の秘法。○榮花「大元法といふ事は唯おほやけのみぞ昔より行はせ給ひける」

だいげんすゐ 大元帥(名) 海陸軍を統御し給ふ天皇陛下の御職。

たいふ 大夫(名) 武家にて家老の異名。

たいぶ 大部(名) 書物の一部にて册數の多き事。

だいぶ 大夫(名) 〔一〕職の長官。左京大夫、修理大夫、大膳大夫の類。〔二〕五位の異名。諸大夫と續け稱ふる時此發音を用ふ。

だいぶつ 大佛(名) 大なる佛像。

だいぶつくやう 大佛供養(名) 大佛の落成せし時にする供養。

だいぶん 大分(副) 餘程。●頗。

だいふくごく 大福德(名) 大幸運。●大金持。

だいふくちやうじ 大福帳(名) 商家にて臺帳を祝ひ言ふ詞。

だいふくちやうじや 大福長者(名) 大金滿家。

だいふくもち 大福餅(名) 搗餅に餡を入れたるもの。紅白の二種あり。

たいこ 太皷(名) 樂器の名。木の胴に皮を張りて打ち鳴らすもの。樂太皷、能太皷、陣太皷等種々あり。

たいこ 太古(名) 〔一〕大昔。〔二〕歷史上特別には神代時代の稱。

たいご 隊伍(名) 兵士の組々。

だいご 醍醐(名) 藥種の名。酥より取りたる液。

たいこばし 太皷橋(名) 太皷の胴を二つ切にして掛けたる如くそりたる橋。

だいこん 大根(名) 野菜の名。菜の一種にして其根太く白くして最も普通の食品となるもの。

たいこう 大功(名) 大なる功勳。

たいこう 退紅(名) 〔一〕桃色の布の狩衣。昔し公卿大名の行列に傘沓など持つ仕丁の着たる服。〔二〕退紅の衣を着る仕丁。

たいかう 退校(名) 學校を退く事。●退學。△(動)—退校す。

たいかう 大綱(名) おほづな。●大要の綱領。●大器。

たいかふ 太閤(名) 關白職を其子に讓りて後。前關白を呼ぶ稱。

だいがゴう 題號(名) 書物、新聞、雜誌等の外題。

たいこうち 太皷打(名) 能樂などにて太鼓を打つ人。

たいかうてんわう 大行天皇(名) 天皇又は上皇の崩御ありて未だ御諡を奉らぬ間に申す稱號。

だいかうじ 大柑子(名) 大なる柑子。(伊勢)

だいごく 大曲(名) たいきょくに同じ。(雅)

だいこく 大黑(名) (一)大黑天。(二)僧徒の妻の異名。

だいこくてん ●梵妻。

大黑天(名) (一)佛教にては飲食の神として厨に祭らるゝもの。(二)神道にては出雲の大國主神の異名にして幸運を司る神。

だいごくでん 大極殿(名) 昔し大内裡の正殿にて八省院の中央にありしもの。

たいこもち 太皷持(名) 男藝者の一名。●幇間。

だいゑ 大會(名) 大法會。●大法事。

だいえい 題詠(名) 和歌にいふ詞。題により詠する事。

だいえん 内宴(名) 内々の宴會の意。◎昔し正月廿一日禁中仁壽殿に文人どもを召して宴を賜ひ題を出だして詩を作らしめ給ひし公事。

たいえんれき 太衍曆(名) 稱德天皇の時に用ひられたる曆。

たいてい 大抵(副) 大方。●大概。●大略。

たいてん 退轉(名) 衰亡。●破損。●破産。(動)—退轉す。

たいざ 對座(名) 相對し座する事。△(動)—對座す。

たいざい 滯在(名) 逗留。●滯留。△(動)—滯在す。

だいざい 大罪(名) 大なる犯罪。●重罪。

だいさいじつ 大祭日(名) 國民の國旗を揚げて祝すべき日。●祝祭日。●旗日。

たいさん 退散(名) 集會などの終りて散り〳〵に去る事。△(動)—退散す。

だいさん 代參(名) 其人の代人に神佛に參詣する事。●代拜。

たいざんぷくん 泰山府君(名) 道家にて祭る神の名。人の命など司る神。

たいさ〻う タイソウと發音する詞はたいその處にあり。

たいさく 大作(名) (一)大なる製作物。(二)大によく出來たる製作。●傑作。

たいさく 對策(名) 試檢の答案。(空穗)

だいさく 代作(名) 詩歌文章など人に代りて作る事。△(動)—代作す。

たいき（名）一説には大氣にて大膽の事。一説には多力の音便。○催馬樂「たいきの童の」

たいき　大氣（名）空氣。

たいぎ　大義（名）人として最重んずべき人倫の道。

たいぎ　大儀（名）骨折。●苦勞。●疲勞。

だいき　臺木（名）接木をする時に其臺とする他の樹木。

だいきり　臺切（名）大鋸（おほがの）の一名。

たいきょ　大擧（名）大に軍勢を集むる事。△（動）—大擧す。

たいきょ　退去（名）立ち退く事。△（動）—退去す。

たいげふ（ギョフ）　大業（名）大なる事業。

だいきやう（キョウ）　大饗（名）昔し行はれたる宮又は大臣などの公務上の饗應。新年の大饗、任大臣の大饗などの類。

たいきょく　大曲（名）雅樂にて特に重んずる樂曲。●だいおく。

だいきょくでん　大極殿（名）だいごくでんに同じ。

たいきん　大金（名）澤山の金錢。

だいきん　代金（名）代價としての金錢。

たいきんりきん　大巾利巾（名）昔し伊勢大神宮にて行はれたる獅子舞に牝牡二つの獅子あり其頭に玉ある牡獅子を大巾と名づけ玉なき牝獅子を利巾と名づく。○謠曲「大巾利巾の獅子頭」

たいきゃく　退却（名）退軍。●背進。△（動）—退却す。

だいぎゃく　大逆（名）大なる惡逆。●大惡。●弑逆。

たいきゅう　大弓（名）小弓に對して通常の弓をいふ。

だいぎし　代議士（名）國會議員。

たいめ　（名）對面の略。〈雅〉

だいめいし　代名詞（名）文法上の詞。名詞の代りに用ひらるゝ詞。我汝彼の類。

たいめん　對面（名）面會。●對顏。●たいめ。△（動）—對面す。

だいみやうじん（ミョウ）　大明神（名）神の尊稱。

たいみんちく　大明竹（名）雌竹の一種。

だいみゃく　代脈（名）主治醫の名代に其門生が病人の脈を見る事。又は其人。●代診。

たいし　太子（名）〔一〕皇太子。〔二〕特には聖德太子。○「太子堂」〔三〕佛教にては悉多太子。すなはち釋迦如來。

たいし　大師（名）孝謙天皇の御字に一時置かれたる官

名。太政大臣に當る。

たいし　梶(名)　船の舵。(和名抄)

たいじ　胎兒(名)　母の體内にある兒。

だいし　大師(名)　高僧に朝廷より賜はる尊號。

だいし　大祀(名)　一月齋して行ふ重大なる官祭すなはち大嘗會。

だいじ　大事(名)　重大なる事柄。●大事件。●非常の事。

だいじ　題字(名)　書物の始。または碑文の頭に大きく書く文字。

だいじに　大事に(副)　大切に。●丁寧に。△(形)—大事の。(又)—大事なる。

たいしょ　大暑(名)　暦の詞。二十四氣の一つ。最も暑の烈しき時候。

だいしょ　代書(名)　其人に代りて書く事。●代筆。△(動)—代書す。

だいしにん　代書人(名)　代書を業とする人。

たいしょう　大將(名)　〔一〕古代の制。左右近衛府の長官。〔二〕轉じて一軍の主將。●將軍。〔三〕現今の制。將官の最高級。○「陸軍大將」「海軍大將」

たいじょう　怠狀(名)　おこたりぶみ。●謝罪狀。●あやまり謹文。

だいしやう　大師樣(名)　弘法大師を祖とする書風。

だいしょう　大將(名)　たいしやうに同じ。雅言にては濁音に稱ふる常とす。

だいせう　大小(名)　〔一〕大なるものと小さきものと。〔二〕暦にて大の月と小の月と。〔三〕武家にて大刀と小刀と。●刀と脇差と。〔四〕能樂にて大鼓と小鼓と。

たいじょうとく　退宿德(名)　雅樂の曲名。

だいじょうだいじん　太政大臣(名)　だじやうだいじんに同じ。

だいせうづけ　大小附(名)　月の大小など記したる略暦。

だいせうねつ　大焦熱(名)　地獄の一つ。火に燒かれて眼耳鼻手孔より猛燄を流出するの苦ある世界。(佛教)

だいじょうくわん　太政官(名)　だじやうくわんに同じ。

たいしょうぐん　大將軍(名)　〔一〕中古の制。官軍出征の時節刀を賜ひて三軍を統ぶる大將。

〔二〕後世は幕府の主將。〔三〕陰陽家にては大將神の一つ。

だいしゃうこく
だいじゃうこく　大相國(名)　太政大臣の異名。

だいしゃうさい
だいじゃうさい　大嘗祭(名)　大嘗會に同じ。

だいしゃうじ
だいじゃうじ　大床子(名)　天皇御晝餐の食卓。昔し清涼殿に設置してありしもの。

たいしょく　大食(名)　度外に食ふ事。●おほぐひ。△(動)—大食す。

たいした
だいじだいひ　(形)　大そうな。●重大なる。(俗)　大慈大悲(名)　廣大なる佛の慈悲。(佛教)

たいしん
たいしん
たいしん　大身(名)　德川時代に大祿の人をいへる稱。　對審(名)　對決に同じ。△(動)—對審す。　退身(名)　身を退く事。●退隱。△(動)—退身す。

たいじん　大人(名)　〔一〕年長じたる人。●おとな。〔二〕父。

だいじん　大臣(名)　國家の執政官。古代は太政大臣、左大臣、右大臣、內大臣の四つあり。現今は省の長官。および是等を統轄する全權者。

だいじん
だいしんゐん　大盡(名)　豪家。●富家。　大審院(名)　現今の制。裁判所の最高のところ。

だいじんばしら　大臣柱(名)　能舞臺にて脇師の着座する處の柱の稱。●脇柱。

だいじんぐう
たいしゃ　大神宮(名)　天照大神を祭りたる社。

たいしゃ　大赦(名)　特典にて天下の罪人を赦免する事。△(動)—大赦す。

だいしゃ　代赭(名)　繪具の名。礦物より製して茶色の彩色に用ふるもの。

たいしゃく
たいしゃく　題者(名)　〔一〕和歌の題を出だす人。〔二〕古代僧の職名。

たいしゃく　貸借(名)　金錢の貸し借り。

たいしゃくてん　帝釋(名)　忉利天の主にて佛法を守護する神。(佛教)　帝釋天(名)　帝釋の住む天上界。●忉利

天。

たいしゃせき 代赭石(名) 代赭に同じ。

たいしゅ 大守(名) 〔一〕中古の制。上總・常陸・上野の國守。此三國は親王の御任地なれば特に大の字を加へて云ふ。〔二〕德川時代には藩主。

たいしゅ 大酒(名) 大酒を飲む事。

たいしゅ 大衆(名) 衆徒に同じ。

たいじゅ 大樹(名) 將軍の異名。

たいじゅ 大儒(名) 〔一〕儒道の大家。〔二〕大學者。

たいじゅ 大呪(名) だいすに同じ。(狹衣)

たいしゅつ 退出(名) 役所などより罷り下る事。△(動)—退出す。

だいじゅふのう 臺十能(名) 臺の附きたる十能。

たいびゃうびょう 大病(名) 重き病。●重病。●大患。

たいべうびょう 大廟(名) 伊勢の大神宮。

たいへうヒョウ 代表(名) 其物事の總名代となりて其物事の特性を表はす事。△(動)—代表す。

だいひつ 代筆(名) 其人の名代に文字を書く事。●代書。△(動)—代筆す。

だいひつ 大弼(名) 古代官名。彈正臺の次官。……此下に少弼あり。

だいひざ 大悲者(名) 觀音を云ふ。○源氏「大悲者には異事も申さじ。

だいもつ 代物(名) 代金。●代價。

だいもん 大門(名) 〔一〕大なる門。〔二〕寺にては總門。

だいもん 大紋(名) 武家裝束の名。家の紋を大きく附けたる素袍。

だいもんじ 大文字(名) 〔一〕大の字。〔二〕大の字の形。〔三〕大文字火。

たいまう 大望(名) 大なる希望。

だいもく 題目(名) 〔一〕表題。●題號。●外題。〔二〕特には法華宗にて唱ふる法華經の題號。南無妙法蓮華經の七字。

だいもくしゅう 題目宗(名) 日蓮宗の一名。◎題目を唱ふる故に云ふ。

だいもじび 大文字火(名) 盆の十六日に京都東山にて大の字形に焚く火。

たいせち 大切 たいせつに同じ。△(形)—たいせちの。(副)—たいせちに。○平家「遠路の間に候へば土產糧料ごときの物もたいせちに候ふ。

たいせつ 大切(名) 大事。●丁寧。●懇切。●重大。

たいせつ
たいぜん
大雪(名)　暦の詞。二十四氣の一つ。
泰然(副)　落ち附きたる有樣。●物に動せぬ有樣。(又)—泰然と。

だいせん
提闌(名)　せんだいを逆に誤りたる詞。……せんだいを見よ。○謠曲「聖德太子は救世の提闌」

だいぜん
大膳(名)　大膳職の略。

だいぜんしょく
大膳職(名)　宮內省に屬して諸國より奉る食品の出入を司る役所。官吏は大夫、亮、進、屬あり。

だいぜんしき
大膳職(名)　だいぜんしょくに同じ。

だいぜんせかい
大千世界(名)　佛教にていふあらゆる世界。……一つの日一つの月須彌山を繞り四天下を照す一世界を爲し。一千の世界を小千世界と爲し。一千の小千世界を中千世界と爲し。一千の中千世界を大千世界と爲したるもの。

たいす
對(自動サ變)　相對する。●向ひ合ふ。
たいす
對(他動サ變)　くらぶる。●ならぶる。●對照する。

たいす
帶(自動サ變)　帶ぶる。
だいす
臺子(名)　茶の湯にて風爐、茶碗など載する棚。
だいす
大衆(名)　〔一〕大勢の人數。(空穗)〔二〕たいしゅに同じ。衆徒。(義經記)

だいず
大咒(名)　佛教上の咒文。阿彌陀の眞言。(源氏)

だいす
題(自動サ變)　詩にて云ふ詞。其物事を題にして詩を作る。○「柳に題す」〔二〕題を書く。●題を名づく。○「題して松風集と云ふ」

たいすい
大水(名)　洪水に同じ。●おほみづ。
たいすう
大數(名)　大凡の數。
だいすう
代數(名)　〔一〕代々の數。〔二〕文字等の符號を數字に代へてする算術の一種。

だいすけ
大介(名)　父子續きて介の官に任せし時。其父を呼ぶ稱。

だいろう
太郎(名)　長男。

だいろうぼう
太郎坊(名)　京都愛宕山に住む天狗首領の名。

たいろうづき
太郎月(名)　正月の異名。

たば
束(名)　束ねたるもの。
たば
駄馬(名)　荷を附けたる馬。●荷馬。●小荷駄。
たばぬ
束(他動下二段)　つがぬる。●からげる。

たばる

（他動四段）　賜はるに同じ。○萬代「鷹の子はまろにたばらん手に据ゑて粟津の原の鶉狩せん」

たばかり

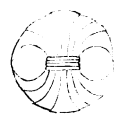
（名）　たばかる事。〔一〕計畫。●策略。●謀議。●相談。〔二〕詐僞。

たばかる

（他動四段）　〔一〕はかるに同じ。●計畫する。●謀議する。●相談する。〔二〕だます。●欺く。●詐僞する。

たばねのし

束熨斗（名）　樸樣の名。熨斗をたばねたる形。（圖）



たばなる

手離（自動下二段）　手より離る。●別るゝ。（萬葉）

たばなれ

手離（名）　手より離るゝ事。●手を放つ事。●別るゝ事。○萬葉「防人に立ちの朝けのかなでの手ばなれをしみ泣きし子等はも」

たばふ

（他動四段）　かばふ。●保護する。●いたはる。○盛衰「身をたばはんには軍場へ向はぬには若かじ」

たばこ

莨。烟草（名）　和蘭語より來る。◎草の名。葉を乾して刻煙草または卷煙草となし火を點し其烟を喫するもの。花は薄桃色にて漏斗形を爲したるもの秋の半に咲く。

たばさむ

手挾（他動四段）　手に挾みて持つ。……多く矢などに云ふ。

たばしる

（自動四段）　走る。●烈しく飛び散る。●ほとばしる。○「霰たばしる」

たに

谷（名）　山と山の間の凹みたる所。

たに

商布（名）　手布（たぬの）の意にて手作布といふが如し。◎古へ調庸布に對したる稱にて人民みづから服用と爲し又は賣買用とせし布。

だに

（名）　虫の名。だにの古名。（和名抄）

だに

（名）　虫の名。犬などの皮膚に食ひ入るもの。

だに

（後）　雅言のだには俗言のさへすらに當る。●でも。●なりとも。●だけでも。○後拾遺「明けばまづ尋ねにゆかん山櫻こればかりだに人におくれじ」……又他の詞を入れて心得べきも多し。たとへば源氏「女御とだに（女御となりとも言はせんと思ひしに其女御とさへ）いはせずなりぬるがあかずくちをしう思さるれば」の類。

たにいし

谷石（名）　谷にある石。○夫木「我心くだけ

おちたる谷石を引あぐる人の無ぞきかなしき」

たにおろし 谷颪(名) 谷を吹きおろす風。●山おろし。○夫木「谷おろしの風し止まれば」

たにかぜ 谷風(名) 谷間の風。

たにそば 谷岨(名) 谷の嶮しき處。(夫木)

たにそこ 谷底(名) 谷の低き處。

たにのと 谷戸(名) 谷の入口。○十六夜日記「谷の戸は隣なれど」

たにん 他人(名) 〔一〕我ならぬ人。●別人。〔二〕親族ならぬ人。

たにぐく 谷蟆(名) 蝦蟇(がま)の古名。古は靈ありて神に通ずるものと言ひ習はせり。○祝詞式「谷ぐくのさわたるきはみ」

たにま 谷間(名) 谷の間。●たにあひ。

たにふところ 谷懷(名) 四方山に圍まれたる谷。

たにかよう 谷行(名) 山伏の山入する時同行者中病に罹る人あれば佛神の心に背くものなりとて之を谷に陷れて同行者より除く事。

たにあひ 谷間(名) 谷の間。●たにま。

たにざく (名) 短册に同じ。(雅)

たにざま (名) 谷の方。

たにざる 手握(自動四段) 〔一〕手に握る。●つかむ。〔二〕手を握る。●拳を固むる。○萬葉「面忘れだにも得すやとたにぎりて打てども懲りず戀の奴は」

たにし 田螺(名) 貝の名。螺の一種にて田の中などに住むもの。

たぼ 髢(名) 〔一〕女の髮を結ふ時。後に張り出して置く所。●つと。〔二〕女。●美人。○「たぼが通る」

たばう 多忙 忙はしき事。●多端。●繁忙。(形)—多忙なる。(副)—多忙に。

だぼく 打撲(名) うちみ。●打傷。

たべ 田部(名) 上古皇室御領地の田を耕し且つ全國の農事を管したる農の一部族。

たべん 多辯(名) 辯舌の多き事。●しゃべり。

たべもの (名) 食ふべきもの。●食物。

だと 駄都(名) 卒都婆の一名。

たとひ 譬喩(名) たとへに同じ。

たどひ 縱令。假令(副) 假に。●よしや。……必ず下に「何々するとも」と受く。

たどり　鶏(名)　雲雀の一名。(字鏡)

たどり　(名)　(一)たどる事。(二)心得。●分別。○源氏「その(音樂の)たどり深き人の今の世にたさ〳〵なければ」

たどる　(自動四段)　(一)探りあるきする。●捜し行く。○源氏「渡殿に分け入りて辛うじてたどり來たり」(二)はっきりせずにある。●不明瞭である。○源氏「萬の事夢のやうにたどられて」(三)捜索する。●吟味する。分別する。○源氏「幼な心地に深くもたどらず」

たどほし　(形。形狀言ク活)　遠しに同じ。(萬葉)

たどたどし　(形。形狀言シク活)　たどらゐ有樣。●はき〳〵せぬ。●つまづき〳〵する。●不安心な。●明かならぬ。○源氏「夕暗の道たどたどしげなる」

たどたどと　(副)　たどりつゝ。●よろ〳〵と。

たどん　炭團(名)　炭の粉を練り固めて火鉢、巨燵などに入れ炭火に代用するもの。

たたう　(名)　たゝうがみの略。

たとふ　譬。喩(他動下二段。古は四段)　ふそへて言ふ。●比する。●比喩する。

たどうと　(名)　ただびとに同じ。

たたうがみ　疊紙。帖紙(名)　たゝみがみの音便。(一)昔し公卿などの懐中して常に携へたる紙。歌など書く料紙にて多く鳥子を用ふ。(二)中に物を入るゝため疊みて作りたる紙の袋。

たどうし　他動詞(名)　文法上の詞。……卷首を見よ。

たどころ　田所(名)　田に作りたる地所。(紀)

たとへ　譬。喩(名)　譬ふる事。●譬へたる事柄。●比喩。

たとへば　例へば(副)　例を取りて言はば。●例せば。

たどき　(名)　たづきに同じ。●よすが。●たより。●せんかた。○萬葉「思ひやるたどきも我は今はなし妹に逢はずて年の經ゆけば」

たとしへなし　(形。形狀言ク活)　喩へやうもなし。●比較すべき物なし。○源氏「たとしへなくこぐらし」

たち　太刀(名)　(一)劍に同じ。(二)特には長く反りて腰に佩く刀。(三)神樂歌の曲名。

たち　(名)　性質。●天才。

たち　舘(名)　大なる建物。●やかた。●貴族の家。●旅舘。

たち　立(名)　立つ事。

たち 達(助名) 等。●ら。○「子たち」「女房たち」

たぢ (名) 草の名。虎杖の古名。(日本紀竟宴歌)

たちる 立居(名) 〔一〕立つ事と坐する事と。〔二〕起居の樣子。●坐作。○「立居振舞」

たちいり 立入(名) 貴人の家に出入する人。

たちいる 立入(自動四段) 〔一〕深入する。〔二〕干渉する。

たちいを 太刀魚(名) 魚の名。たちのうをに同じ。

たちば 立場(名) たちど。●立所。

たちばな 橘(名) 〔一〕木の名。實は蜜柑の小さきもので味酸く。現今柑子と稱ふる果物。……垂仁天皇の御宇に田道間守といふ人勅を奉じて常世の國(海外遠方の地)より持ち歸り種を植ゑはじめたるよし歴史に見ゆ。〔二〕紋の名。〔圖〕

たちばなどり 橘鳥(名) 時鳥の異名。

たちばなる (自動下二段) 遠く隔たる。

たちばなづき 橘月(名) 五月の異名。

たちばら 立腹(名) 腹立ち易き性質。○とりかへばや「たちばらにおはする大臣にて」

たちはくとものを 太刀佩伴緒(名) たぼ長の略にて緒は借字。◎武官の長。(祝詞式)

たちど (名) 立ち居る場所。

たちとり 太刀取(名) 武家にて罪人を死刑に行ふ時首を斬る役人。

たちどまる 立止(自動四段) 歩みながら暫時止まる。●たゝずむ。

たちどころに 立どころに(副) 直に。●即座。●時を移さず。

たちぬひ 裁縫(名) 衣服を造る事。●裁縫。●針仕事。

たちおと 太刀音(名) 切り合ふ時太刀と太刀と相觸るゝ音。

たちわかる 立別(自動下二段) 出立して別るゝ。

たちわき 立湧(名) 摸樣の名。瓢簞を幾個も繋ぎたるやうにうねゝしたる線。

たちはき 帶刀(名) 古代東宮侍衛の武官。

たちはきせんじ 帶刀先生(名) 帶刀の長官。

たちがれ 立枯(名) 木の立ちたる儘枯るゝ事。(夫木)

たぢから 手力(名) 手の力。●腕力。(萬葉)

たぢから 田稅(名) 田地の租稅。

たちからみ (名) 甲冑する時太刀を差し通す爲の輪形

のもの。

たちがく 立樂(名) 立ちて奏する雅樂。……座樂に對していふ。

たちかへる 立歸(自動四段) 〔一〕かへるに同じ。〔二〕行きたる使の直に歸り來て返事を述ぶるを云ふ。○源氏「中絶ねば云々(以上歌)とてやり給ふ。立ちかへり 君にかく云々(以上歌)」〔三〕くりかへす。○萬葉「たちかへり鳴けどもあれはしるしなく思ひわぶれて寢るよしうなき」

たちがみ (名) たてがみに同じ。

たちかぜ 太刀風(名) 切り合ふ時太刀より生ずる風。

たちよる 立寄(自動四段) 立ちながら近寄る。●通り掛りに訪ふ。

たちつけ 裁着(名) 袴の一種。膝より下はしばり寄せて狹く脚半のやうに作りたるもの。●たつつけ。

たちなむ 立並(自動四段) たちならぶ。(雅)

だちん 駄賃(名) 〔一〕駄馬の運賃。〔二〕轉じて總ての賃金。

たちうち 太刀打(名) 太刀にて切り合ふ事。

たちうを 太刀魚(名) 魚の名。たちのうをにに同じ。

たちのうを 太刀魚(名) 魚の名。細く長くして銀色の光を帶び其形太刀に似たるもの。

たちのく 立退(自動四段) 立ち去る。

たちぐらみ (名) 立ち上れば眩暈のする病。

たちくく 立潜(自動四段) 立ちくゞる。○萬葉「足引の木の間たちくゝ時鳥」

たちやく 立役(名) 芝居にて男形の役者。

たちまち 忽(副) 直に。●即座に。●即刻。●忽然。

たちまちのつき 立待月(名) 陰曆十七日の夜の月。◎暮れて後立ながら待居る間に出づるの意。

たちまふ 立舞(自動四段) 〔一〕立ち交り物事に關係する。○源氏「見知り給はぬ世のうさに立ちまふべくも思されず」〔二〕立ちめぐる。●立ち圍む。○大本「咲きこけり雲の立ちまふ生駒山花の林の春の曙」〔三〕立ちて舞を舞ふ。○謠曲「立ち舞ふ袖のかざしかな」

たちまじる 立交(自動四段) 其群になる。●入り立つ。

たちふ (名) たちふうりの略。○小大君集「前にありけるたちふといふ瓜を黄なる色紙に包みて

大舍人なりける翁に取らせたりければ」

たちふうり (名) 小さき瓜の名。(和名抄)

たちこゆ 立越(自動下二段) (一)すぐる〻。●ぬきんでる。(二)罷越す。

たちごも (名) こもはかもの轉。◎飛び立つ鴨。(萬葉東歌)

たちえ 立枝(名) 立ちたる枝。○金葉「鴨の居る櫨の立枝の薄紅葉たれ我宿の物と見るらん」

たちあひ 立合(名) 立ち合ふ事。

たちあがる 立上(自動四段) 坐し又は臥したる人の立つ。

たちあかし (名) 松明。(雅)

たちあふ 立合(自動四段) (一)出合ふ。(二)其場に共に臨む。(三)勝負する。●戰ふ。

たちき 立木(名) 地に立ち居る樹木。

たちぎき 立聞(名) 物蔭に立ち隱れて人の話を聽くいふ。

たちぎみ 立君(名) 辻に立ちて賣淫する女。●辻君。

たちみ 立身(名) 立たんとする身構。

たちみ (名) 立ちながらにて見物する事。○「芝居の立見」

たちしほ 斷鹽(名) しほだちに同じ。

たちびな 立雛(名) 立ち姿の雛人形。

たちもの 裁物(名) 衣類に造る爲に布地など裁ち切る事。

たちもの 斷物(名) 祈願のため神佛に誓ひて斷ちたる食物。

たちすくむ (自動四段) すくむ。●身を縮むる。○新六帖「人知れぬ山田のそほづさのみやは立ちすくみても世をば盡さん」

たちすくみ (名) 佛を云ふ伊勢齋宮の忌詞。

たり 人(名) 人を數ふる詞。○「三たり」「四たり」

たり (自動ラ變) とありの約。◎としてある。●といふ有樣である。○「一國に君たる人」「茫々たる海」

たり (自動ラ變) てありの約。◎過去をあらはす詞。俗語にてはたといふ。○「花咲きたり」「出でたる月」

たりを 垂尾(名) 垂れたる尾。(歌詞)

たりやうう 多量(名) 分量の多き事。△(形)—多量なる。(副)—多量に。

たりくび 方領(名) 裝束に云ふ詞。直垂素袍などの襟

の稱。●はうりゃう。〔圖〕

たりき 他力(名) 〔一〕他人の力。〔二〕佛教にて阿彌陀佛の力。……其助力に賴りて淨土に生るゝを云ふ。……自力の對。

たりきのふね 他力舟(名) 阿彌陀の衆生を救ふ力を舟にて水を濟すに譬へて云ふ。

たりゅう 他流(名) 我と異なる流儀。

たぬき 狸(名) 獸の名。犬に似て小さく口は尖りて尾の太きもの。

たぬきねいり 狸寢入(名) 僞りて眠りたる振をする事。

たぬし 田主(名) 田の持主。●田の作主。(天木)

たぬし (形。形狀言シク活) 樂しの古言。(萬葉)

たる 樽(名) 酒などを入るゝための蓋ある桶。

たる 垂(他動下二段) 垂れしむる。●垂らす。

たる 足(自動四段) 充分である。●滿足する。

たる 垂(自動下二段。古ハ四段) 下へさがる。●したゝる。

たるひ 垂氷(名) 軒などに滴りたる水の氷りて下りたるもの。……現今いふつらゝ。

たるがき 樽柿(名) 酒樽に密封して澁を去りたる柿の實。

たるむ (自動四段) 張りの弱る。●弛む。

たるましゅう 達磨宗(名) 〔一〕禪宗の一名。〔二〕和歌の一體。言葉をいたはらずしてよみたるもの。◎不立文字の意。(無名抄)

たるき 垂木。椽(名) 家の棟より軒に渡したる木。

たるみ 垂水(名) 瀧の一名。○萬葉「岩走るたるみの上の早蕨の萌え出づる春になりにけるかも」

たるみ (名) たるむ事。●ゆるみ。

たるし (形。形狀言ク活) 身體の疲れて懶き有樣。●たゆし。

たなり (名) 山の崖きて凹形になりたる處。●たわ。○萬葉「足引の山のたなりにたつ雲を」

たなる 手折(他動四段) 手にて折り取る。

たなたなと (副) たなやかに。●しなやかに。

たなやか 〔一〕しなやか。〔二〕顏姿の美しき事。……(形)—たなやかなる。(副)—たなやかに。

たなやぐ (自動四段) たなやかになる。

たなやめ 手弱女(名) たなやかなる女。●美女。●たわやめ。

たをさ 田長（名）〔一〕田部の長。〔二〕田の作主。（雅）

たをさどり 田長鳥（名）時鳥の異名。

たをめかす （自動四段）撓ます。●しなはす。○枕「あしう明くれば障子などもたをめかし」

たわ （名）〔一〕たをりに同じ。（記）〔二〕寝起きたる時髪に枕の跡の附きたる處。○新六帖「人間ば、如何にはのべん朝寝髪今朝手枕にたわつけにけり」

たわに 撓（副）撓むまでに。●ひわ〳〵するほど。●しなふほど。●たわ〳〵に。○元輔集「小萩もたわに結ぶ白露」△（形）―たわなる。○散木「たわなる萩に秋風ぞ吹く」

たはゞる （自動下二段）たはむる たはくに同じ。

たわわに （副）たはにに同じ。○拾遺「足引の山路も知らず白樫の枝もたわ〳〵に雪の降れ〳〵ば」

たはゞわざ （名）戯れたる所爲。

たはゞれを （名）〔一〕たはけたる男。〔二〕放蕩なる男。●遊冶郎。

たはゞれうた （名）狂歌。

たはゞれぐさ （名）蓬の名。

たはゞれめ （名）遊女。

たわら 俵（名）藁を編みて米麥などを入るゝもの。

たわらは 手童（名）わらはに同じ。（萬葉）

たわらご 俵子（名）生海鼠（なまこ）の異名。

たわむ 撓（他動下二段）撓ましむる。

たわむ 撓（自動四段）〔一〕眞直なる物の曲る事。●しなふ。〔二〕弛む。●たゆむ。

たはゞむる 戯（自動下二段）まじめでなくある。●ふざける。●ごうける。●おどける。●しゃれる。●たはける。

たはゞれ 戯（名）〔一〕戯むる〻事。●滑稽。●じゃうだん。〔二〕遊戯。

たはゞく （自動四段）〔一〕戯むる〻。●ふざける。●馬鹿げる。〔二〕猥褻の所爲を爲す。

たわやめ （名）たをやめに同じ。

たはゞやすし （形。形狀言ク活）たやすしに同じ。

たはゞけ （名）〔一〕戯むれ。●ふざけ。●馬鹿げたる事。〔二〕たはけたる人。●阿呆。●馬鹿。

たはゞる 戯（自動下二段）たはむるに同じ。

たはゞれ 戯（名）たはむれに同じ。

たはゞこと （名）たはけたる言葉。●戯言。●狂言。

たはゞし （形。形狀言シク活）淫奔なる有樣。●みだら

な。●不品行な。○榮花「九條の師輔の大臣いとたはしくおはしてあまたの北の方の御腹に男十一人女六人ぐおはしける」

たわする　（自動下二段）　忘るに同じ。（雅）

たか　鷹（名）　〔一〕鳥の名。形鳶に似て猛く。人に飼はれて能く雉、鶉の類の鳥を捕るもの。〔二〕能面の名。

たか　高（名）　物の量の多さ。●嵩。●額。

たか　竹（形）　竹の。○「たかやぶ」「たか箒」

たが　箍（名）　竹を細く削りて組み合せ輪として桶樽などにはむるもの。

たかい　他界（名）　德川時代。將軍の薨去をいふ。

たがひィ　違（名）　ちがひに同じ。●相違。●差。

たがひィに　互に（副）　双方諸共に。●かたみに。

たがひィちがひィに　互違に（副）　代り代りに。●入り代りに。

たかいななき　高嘶（名）　高音に馬の嘶く事。（謠曲）

たがひィめ　違目（名）　ゆきちがひ。●まちがひ。●衝突。（源氏）

たかば　鷹場（名）　鷹狩の場所。●鷹場。

たかば　竹葉（名）　竹の葉。（萬葉）

たかば　高張（名）　たかばりちゃうちんに同じ。

たかばりぢゃうちん　高張提灯（名）　提灯の一種。竿に附けて高く揭ぐるもの。

たかばかり　竹量（名）　竹の物さし。（和名抄）

たかはた　高機（名）　機の一種。人の腰掛けて織るやうになりたるもの。

たかばやし　竹林（名）　竹藪に同じ。

たかに　高荷（名）　大荷物。

たかばぼうき　竹箒（名）　竹の枝にて造りたる箒。

たかほこ　鷹矛（名）　鷹をとまらする矛木。

たかさり　竹取（名）　竹を切り取り細工などにして營業を立つる人。（竹取物語）

たかどうろう　高燈籠（名）　上開き下すぼまりて板の屋根を添へたる燈籠。元祿の頃は死人のありたる家にては其七回忌まで毎年七月朔日より晦日まで點じたるもの。

たかどうだい　高燈臺（名）　中古燈臺の一種讀書などするために殊に高く作りたるもの。〔圖〕

たかどの 高殿(名) 二階三階などの建物。●閣。●樓。

たかとも 高鞆(名) 鳴る音の高き鞆。(記)

たがぬ (他動下二段) つかぬに同じ。

たかる (自動四段。古は下二段) 虫などの集まり附く。○記「蛆たかれとろゝぎて」

たかはら 竹原(名) 竹林に同じ。

たかわらひ 高笑(名) 聲高く笑ふ事。

たかかひ 鷹飼(名) 鷹を飼ふ事。●鷹を飼ふ人。

たかがり 鷹狩(名) 鷹を放ちて鳥を捕へしむる狩。●鷹野。●放鷹。

たかがき 高垣(名) 〔一〕高き垣。〔二〕城の塀。

たかだかに 高々に(副) 高く。●遙に。○萬葉「たかだかに君待つ夜らは」

たかたかゆび 高高指(名) 手の最も長き指。●中指。

たかだんし 高檀紙(名) 紙の名。檀紙の大なるもの。

たかだま 竹玉(名) 細き竹の管を一二分づゝに切り數十個緒に貫きて玉の如くに作り。古へ神を祭る時などに用ひたるもの。○萬葉「竹玉をしゞにぬきたれ」

たかづかさ 鷹司(名) 古へ禁中にて御用の鷹を飼ひたる役所。

たかづの 高角(名) 兜の前立の一種。角を作り附けたるもの。一名は被立(はらだて)。〔圖〕

たかつき 高坏(名) 足一つありて上下共に丸くなりたる食器の名。土製が本にて後世は木製の漆器なるが多し。〔圖〕

たかぬ 高嶺(名) 高き嶺。

たかね 高音(名) 高調子。

たかね (名) 飴の古名。(紀)

たがね 鑿(名) 金工の具。鑿の如きもの。

たかな 菘(名) 野菜の名。大葉辛子(おほはからし)ともいふ。

たかなは 高繩(名) 繩にもちを附け一間ほど高く張り置きて鳥を捕る方法。

たから 寶(名) 〔一〕最も貴重すべき物。●寶物。〔二〕金錢。●財寶。●財貨。

たからか 高 高くある有樣。●たかやか。(形)—たからかなる。(副)—たからかに。

たからむすび 寶結(名) 紐の結方の名。〔圖〕

たからのいけ　寶池(名)　佛教にて極樂世界にありといふ池の名。七寶もて鏤め飾りたる池。○草庵集「蓮咲く寶の池に漕ぐ舟のまづ面影に浮びぬるかな」

たからのわっう　寶王(名)　財寶の持主。●福德長者。(空穗)

たからのうゑき　(名)　寶樹の譯語。◎佛教にていふ佛の國の樹木。枝に寶の生するもの。(續古今)

たからのくらゐ　寶位(名)　寶祚の譯語。◎天皇の御位。○夫木「宮濱の砂のこすな我君の寶の位かうへ見んかし」

たからのやど　寶宿(名)　福德長者の家宅。○好忠集「昨日見し寶の宿も今日は淺茅が原と露しげくて」

たからのやま　寶山(名)　寶の多く集まり山を爲せるもの。

たからぶね　寶船(名)　七寶七福神を載せたる舟。世俗一月二日の夜これを畫がきたる紙を枕に敷きて寢れば吉夢を見るとてする事。

たからもの　寶物(名)　寶として貴ぶ物。●ぼうもつ。

たかむ　(他動下二段)　高くする。

たかむな　(名)　筍の古名。(記)

たかむなさか　高胸坂(名)　仰臥したる人の胸を山坂の形に見立てゝ云ふ詞。(記)

たかむら　篁(名)　竹藪。

たかむしろ　竹莚(名)　竹にて編みたる莚。

たがふ　違(他動下二段)　違ばしむる。●ちがへる。

たがふ　違(自動四段)　ちがふ。●相違する。●そむく。●違背する。

たかの　鷹野(名)　〔一〕鷹狩をする野邊。●狩場。〔二〕鷹狩。

たかのは　鷹羽(名)　紋の名。(圖)

たかのとり　鷹の鳥(名)　鷹の捕る鳥の意。◎雉子。(雅)

たかのこ　鷹子(名)　催馬樂の曲名。

たかのみこ　(名)　たかみこに同じ。(堀川)

たかくら　高座(名)　たかみくらに同じ。(萬葉)

たかくらの　高座(枕)　高御座を裝飾する御簦の意にて續けたる枕詞。○萬葉「高座の三笠の山」

たかくさ　高草(名)　丈高く生ひ茂りたる草。○夫木「富士の裾野に茂る高草」

たかや　鷹屋(名)　鷹を飼ふ鳥屋。

たかやりど　高遣戸(名)　高く作りたる遣り戸。

たかやか　高き有樣。●たからか。(形)―たかやかなる(副)―たかやかに。

たかやま　鷹山(名)　催馬樂の名。

たかやぶ　竹藪(名)　竹の藪。●篁。●竹林。

たがやさん　(名)　木の名。南洋より輸入するものにて謂ゆる唐木の一種。

たがやす　耕(他動四段)　たがへすに同じ。

たかまる　(自動四段)　高くなる。

たかまがはら　高天原(名)　たかまのはらに同じ。

たかまのはら　高天原(名)　(一)天上にて神のまします國。(二)天に同じ。

たかまゆ　高眉(名)　男子の眉毛を剃り落して別に額に畫がきたる眉。昔し殿上人の元服以後十六七歳まで爲したる事。

たかけ　簞(名)　籠製の食器。

たかぶる　(自動四段)　高慢に振舞ふ。

たかふだ　高札(名)　かうさつに同じ。●立札。●掲示札。

たがへェる　手返(自動四段)　鷹に云ふ詞。放したる鷹の手に歸り來る。○夫木「おぼつかなたがへる鷹もいかならん狩場の小野の雪の夕ぐれ」

たがへェし　耕(名)　耕作。●農事。

たがへェし　(名)　古代遊戯の名。腕押の類ならん。(和名抄)

たがへェす　耕(他動四段)　田を打ちかへす。●田を作る。●耕作する。

たかてこてに　高手小手に(副)　手を後に廻して高く縛り上ぐる有樣。

たがさ　田笠(名)　田を作る人の着る笠。(散木)

たかさご　高砂(名)　(一)高く砂の積み重なりて成れるところの意。◎山の異名。……但し謡曲などにあるは播州の地名なり。(二)催馬樂の曲名。

たかぎのかみ　高木神(名)　高皇產靈神の一名。(記)

たかゆく　高行(自動四段)(枕)　高く空を飛ぶ。……故に又鳥の名の文字に冠らする枕詞ともなる。○記「高ゆくや隼別」

たかみ　高み(名)　高きところ。●項上。

たかみ　(名)　鯽の懸(つかみ)。○記「鯽のたかみとりしばり」

たかみくら　高御座(名)　(一)天皇の御座。●玉座。(二)

たかみむすび
たかし

天皇の御位。●天位。

（名）　猿の異名。……昔し日吉神社にて。

高（形。形狀言ク活）　地面より最も遠し。●最下級より最も遠し。●最小敷より最も遠し。●耳に響く事の最も大なる。●價の不廉である。

たかしる

高知（自動四段）　〔一〕高く知らしめす。○「萬葉「高知るや天の御影」〔二〕高く著るしく顯はす。○祝詞式「高天原に千木高知り」

高潮（名）　つなみ。

たかしほ
たかじやう

鷹匠（名）　鷹を飼ふ人。

たかしこ

竹尻籠（名）　竹にて造れる尻籠。●竹の籠。（長門本平家）

たかびと

鷹人（名）　鷹飼に同じ。

たかひかる

高光（枕）　高く光る日と續く枕詞。○萬葉「高光る日の御子」

たかひく

高低（名）　高き事と低き事と。●かうてい。

たかひざまづき

高跪（名）　腰を高くして跪く事。（枕）

たかひも

高紐（名）　鎧の肩に附たる紐。

たかせ

高瀨（名）　〔一〕高き瀨。淺くて舟の越しがたき處。〔二〕高瀨舟の略。○夫木「古田川岸の柳のみなれ竿かりしく波に高瀨さすなり」

たかせぶね

高瀨船（名）　〔一〕高瀨を棹し越すために底を淺く平たく作れる舟。〔二〕現今は大きなる舟を云ふ。◎高瀨の舟の意にや。

たかすがき

竹簀垣（名）　竹簀にて作れる垣。○月詣集「五月雨に賤の篠屋のたかすがきふしどころまで水ぱ來にけり」

たかすなご

高砂（名）　海邊にて砂の堆くなりたる處。○新六帖「須磨明石浦の見渡し近けれど歩みぐるしき高すなごかな」

たかすき

（名）　上古食物を載せたる臺。高坏、三方の類。（延喜式）

たより

便（名）　〔一〕たよる事。●よるべ。〔二〕おとづれ。●音信。〔三〕人の行く途の序。●幸便。

たよる

便（自動四段）　頼みにする。●つてを求むる。

たよわし

手弱（形。形狀言ク活）　婦人、小兒など體力の弱き有樣。●かよわし。

たよらに
たよう

（副）　丈夫に。●たしかに。（萬葉東歌）

多用（名）　用事の多き事。●多忙。△（形）―多用なる。（副）―多用に。

たよせ（名）　たより。●ついで。○夫木「忍びかねつみしらするを女郎花たよせに折ると思ひ疎むな」

ただ　唯（名）　無代價。

ただ　唯（形）　通例の。●世俗の。

ただ　唯。只（副）　〔一〕外には無く是のみの意。●ひとり。○「唯有明の月ぞ殘れる」〔二〕わづか。●たった。○源氏「唯五六日の程に」〔三〕ひたすら。●一向に。●全く。●專ら。○好忠集「燒かずとも草は萌えなん春日野を唯春の日にまかせたらなん」〔四〕いたづらに。●むだに。○新古今「頼めぬに君來やと待つ宵の間のふけゆかでたゞ明けなましかば」……（又）―たゞに。△（形）―たゞなる。

ただいま　只今（副）　直に。●今直に。●即刻。

ただに（副）　〔一〕ただちに。〔二〕いたづらに。〔三〕唯獨り。

ただぢ　直路（名）　眞直の道。（雅）

ただちに　直（副）　すぐに。●ぢきに。●直接に。

たたり　揣（名）　絲を掛けて繰る框。

たたり　崇（名）　崇る事。●神罰。●物の怪。●怨靈。

たたり　立（自動ラ變）　立てり。立ちたりに同じ。○千五百番。歌合「春霞たゝるは都さても猶山の奥には雪や降るらん」

たたる　崇（自動四段）　神佛の罰があたる。●物の怪が附く。●怨靈が讎を爲す。

ただる　爛（自動下二段）　皮膚の破れて赤肌の出づる。

たたはゞし（形。形狀言シク活）　湛へて居る有樣。●充分なる有樣。●完備したる有樣。○源氏「たゝはしき神寶」萬葉「望月のたゝはしけんと」

ただか（名）　物を隔てずして直接に達する場所。○萬葉「我はそ戀ふる妹がたゞかに」

たたかふ　戰。鬪（自動四段）　擊ち合ふ。●切り合ふ。●戰爭する。●合戰する。

ただよはし　漂（形。形狀言シク活）　漂うて居る有樣。●どちつかずに浮きゝして居る。

ただよはす　漂（他動四段）　漂はしむる。

ただよふ　漂（自動四段）　浮ぶ。●どちつかずに浮きゝして居る。●ぶらつく。●漂泊する。

ただただと（副）　唯一心に。●他事なく。○宇治「た

〻くと走り出でられにけり」

たたれめ 爛目(名) 病の名。瞼の爛るゝもの。

たたなはる (自動四段) 疊まれて重なる。○萬葉「たゝなはる青垣山の」濱松「伏し給へる傍に髪ういとこちたくたゝなはりたる」

たたなか 直中(名) 眞中。●中央。

たたなづく (自動四段) 疊まり附く。●山などの疊みなさるゝ。○記「大和は國のまほろば。たゝなづく青垣山ごもれる大和しうるはし」

たたならず (副) 一通りならず。●すぐれて。●特別に。○源氏「たゞならずけしきよしづきて」△(形)—たゞならぬ。

たたなめて 楯並めて(枕) 楯を並べて射ると言ひ掛けたる枕詞。○記「たゝなめて いなさの山」萬葉「たゝなめて いづみの川」

たたら 蹈鞴(名) 鞴(ふいごう)の一種。足に蹈みて風を送るもの。

たたらめ 莘(名) 草の名。山澤に生じて葉は芥の如く蒲に似て黄なる穂を出だすもの。○風俗歌「たゝらめの花」

たたらめ (名) 病の名。爛目に同じ。(和名抄)

たたん 多端(名) 用事の多き事。●多忙。

たたむ 疊(他動四段) 折り返して重ぬる。●同じ物を重ぬる。

たたんがみ 帖紙(名) たゝうがみに同じ。(後撰)

たたむき 腕。臂(名) うで。●ひぢ。

たたふ 稱(他動下二段) 充分に賞贊する。●神德などを贊美する。

たたふ 湛(他動下二段) 湛へしむる。

たたふ 湛(自動四段) 溢るゝばかりに水の滿る。

ただのみな 諱(名) いみなに同じ。

たたく 叩(他動四段) 音を立てゝ打つ。

ただま 手玉(名) 上古の人の手に纏きたる玉。(記)

たたまり 疊(名) 疊まりたる事。●かさなり。

たたまる 疊(自動四段) 疊みたる如くなる。●重なる。●積る。

たたぶしのまひ 楯節舞(名) 上古雅樂寮の舞樂の名。甲冑にて刀楯を把り舞ふもの。(續紀)

ただごと 唯言(名) (一)事實の儘を正直に述べたる言。(二)詩歌ならぬ平語。(枕)

ただごと 唯事(名) 常の事。●平時の事。○竹取「唯事にも侍らざめり」

ただごとうた　唯言歌(名)　物に喩へもせずして現はに意味を述べたる和歌。(古今序)

たたへごと　稱辭(名)　神前にて神德を賛美し、又は供物などを稱美して述ぶる言葉。(祝詞式)

ただて　直手(名)　其人の手より直にする事。○萬葉「水を賜へな妹がたゞてに」

たたあはせ　立合(名)　相撲の行司の古名。

たださ　(名)　正しき樣。●直なる樣。(萬葉)

ただざまに　直樣に(名)　まっすぐに。●直線に。○枕「長々とただざまに行けば」

たたき　敲。叩(名)　〔一〕敲く事。又敲きたる物。〔二〕德川時代の制。笞にて敲く刑罰。

たたきばなし　敲放(名)　德川時代の制。敲きて後放免する刑罰。

ただぎぬ　唯衣(名)　中古貴女の裝束にて唐衣の衣類を云ふ。○空穗「唐綾。唯衣一つまぜず皆赤色」

たたきみこ　敲巫(名)　弓を敲きて神おろしをする巫女。●口よせ。

ただめ　直目(名)　夢幻ならずして目に見る事。○萬葉「たゞめに君を見てばこそ」

たたみ　疊(名)　薦、藺などにて織りたる室内の敷物。……昔は今いふ薦、薄絲の類にて疊みては何くへも持ち行かるゝやうに作れる故此名あり。今のは床に表を縫ひ附けて持ち運ばれぬやうに作りたれば名の意味は失ひたるなり。故に古へは「疊持たせて」「疊ひろげて」などの詞あれど。今は「敷く」とならでは、ふべくもあらず。

たたみかく　疊掛(自動下二段)　引き續き〳〵する。●迫ひ掛け〳〵する。

たたみがさ　疊傘(名)　からかさ。

たたみけめ　(枕)　疊薦の轉。むらじに掛けたるは室内に敷くものゆゑ疊薦の室敷(むろしき)と續く意にや。○萬葉「たゝみけめ むらじが殘の」

たたみこも　疊薦(枕)　疊みたる薦は重なるものなれば重に掛かる枕詞。○記「たゝみこもへぐりの山の」

たたみざん　疊算(名)　世俗にする占の一法。何か物を疊の上に落して其落ちたる處より疊の目を數へてするもの。

たたみさし　疊刺(名)　疊を刺す工人。●疊屋。

たたみぎぬ 帖絹(名) 絹を平たく疊みたるもの。

ただし 正(形。形狀シク活) 正道に叶ひてあゝ有樣。● 曲らずにある有樣。

ただし 但(副) 〔一〕前文の意を轉ずる詞。● しかしながら。● されど。○「此歌いとめでたし。但し初句を云々と改めなば更に妙ならん」〔二〕前文の意を更に委しく云ふ詞。● 内譯を言へば。○「學年を分つて前後の二期とす。但し前期は何月に始まり云々」〔三〕又は。● 或は。○「我行くべきか。但し君來るべきか」

ただびと 唯人(名) 〔一〕皇族ならぬ人。〔二〕攝家などにあらぬ人。● 無資格の人。〔三〕神佛聖人にあらぬ人。● 凡夫。

ただす 立(自動四段) 立つを延べて敬語にしたる詞。

ただす 正(他動四段) 正しくする。● 改正する。

ただす 糾(他動四段) 罪を訊問する。

ただす 質(他動四段) 問ひ尋ねて判然さする。● 質問する。

ただすつかさ (名) 彈正臺に同じ。

ただずむ 彳(自動四段) 立ちて休む。● 立ちどまる。

たたずまひ (名) 〔一〕立ち具合。● 立ちあらはれたる樣子。● 景色。○「霞のたゝずまひ」「雲のたゝずまひ」「霧のたゝずまひ」「煙のたゝずまひ」「山のたゝずまひ」「若のたゝずまひ」〔二〕立居振舞。○源氏「公私の人のたたずまひよきあしき事の」

たたずまふ (自動四段) たゝずむに同じ。

たれ 垂(名) 〔一〕垂るゝ事。● 垂れたるもの。〔二〕能裝束にて頭に被る長き毛。

たれ 誰(代) 人に用ふる疑問代名詞。

だれ (代) 誰に同じ。(俗)

たれどき 誰時(名) いはたれどきに同じ。

たれどきぼし 誰時星(名) 明の明星。又宵の明星。

たれぬの 垂布(名) 帳に同じ。

たれを 垂尾(名) たりをに同じ。

たれかご 垂籠(名) 駕籠の一種。簾を垂れたるもの。

たれがし 誰某(代) 何某某に同じ。

たれこむ 垂籠(他動下二段) 簾を垂れて室内に籠る。● 憂ありて外出せぬ。● 病臥する。(雅)

たれぎぬ 垂衣(名) むしたれぎぬに同じ。

たれそ (句) たゞに同じ。

たそ（句）　問の文句。誰ぞ。

たそがれ　黄昏（名）　夕暮。●薄暮。●かはたれどき。

たそがれどり　黄昏鳥（名）　時鳥の異名。

たそがれどき　誰彼時（名）　たそがれに同じ。

たそがれづき　黄昏月（名）　夕暮の空に見ゆる月。●夕月。

たそがれぐさ　黄昏草（名）　夕顔の異名。

たつ　龍（名）　りょうに同じ。

たつ　辰（名）　十二支の一つ。辰の時は午前八時。辰の方角は東南の東によりたる方

たつ　立（自動四段）　〔一〕竪になる。●高く顯はるゝ。●起くる。●突き立つ。〔二〕出來る。●顯はるゝ。〔三〕月日の經過する。〔四〕出立する。●立ち去る。〔五〕其位を繼ぐ。〔六〕其働を爲し得る。●專ら其物事に入り込む。

たつ　立（他動下二段）　立たしむる。●起す。

たつ　絶。斷。裁（他動四段）　切り離す。●其事を中止する。

たつ（自動下二段）　奉るに同じ。○千五百番歌合「九重に今日たてそむる氷こそ風にも解けぬ例なりけれ」

たつ　田鶴（名）　田に住む鶴の意。◎鳥の名。鶴。（雅）

たつ（自動四段）　名詞の後に續けて用ふる詞。らしくある。●めきて見ゆる。○源氏「田舍家だつ柴垣」同「乳母だつ人」

たっとむ　貴。尊（他動四段）　たふとむに同じ。

たっとぶ　貴。尊（他動四段）　たふとぶに同じ。

たっとし　貴。尊（形。形狀言ク活）　たふとしに同じ。

たっちゅう　塔中（名）　寺中に同じ。

たつぬ　尋（他動下二段）　〔一〕探る。●捜す。〔二〕問ふ。〔三〕訪ふ。

たつかひィ　田令（名）　古へ國々の屯倉を司りたる官。

たつかづえ　手束杖（名）　手に握み持つ杖。＝たゞ杖と云ふに同じ。（萬葉）

たつかなし（形。形狀言ク活）　たづきなしに同じ。（萬葉）

だっかん　脫監（名）　監獄を脫する事。●破獄。△（動）—脫監す。

たつかのゆみ　手束弓（名）　たつかゆみに同じ。

たつかゆみ　手束弓（名）　手に握り持つ弓。＝たゞ弓といふに同じ。……但し袖中抄に「手束弓とは紀伊國風土記を案ずるに云はく。弓のとつ

かを大きにするなり。それは紀伊國雄山の關守が持つ弓なりとゐへる。さればたつかゆみといふなるべし」などいへる說古よりありたれば多くは紀の關守が執るものゝやうに歌によめり。

たつがみ 鬣(名) 馬の髮。●たてがみ。(續政集)

たつがしら 龍頭(名) 兜の裝飾に用ふる龍の頭の形。大將に限りて附くるもの。

たった (副) 唯に同じ。(俗)

たつたづし (形。形狀言シク活) たづ〳〵しに同じ。○金槐集「夕闇のたづ〳〵しきに時鳥聲うらがなし道や惑へる」

たつたひこ 龍田彥(名) 風を司る神。社は大和國平群郡にあり。○萬葉「我行きは七日は過ぎじ龍田彥ゆめ此花を風に散らすな」

たつたひめ 龍田姬(名) 龍田彥と同社に祭られ共に風を司る女性の神。兼ねて又秋をも紅葉をも司る。

だっそ 脫疽(名) 病の名。手足など腐るもの。

たつつまひ 殊舞(名) 上古雅樂寮の舞曲の名。(紀)

たつづみ 手皷(名) 皷の代りに手と手を拍ち合はすこと。(空穗)

たつな 手綱(名) 馬具の名。轡に結びて乘る人の手に握る繩。〔圖〕

たつなみ 立濤(名) 紋又は摸樣の名。波の立ちたる形。〔圖〕

たつら 田面(名) たのもに同じ。(伊勢)

たつのうま 龍馬(名) りうめに同じ(夫木)

たつのこま 龍駒(名) 龍の馬に同じ。(夫木)

たつのみかほ 龍御顏(名) 天子の御顏。○永久四年百首「あはれ我君まし〻時。龍の御顏に近づきて」

たつのみや 龍宮(名) りうぐうに同じ。

たつのみやひめ 龍宮姬(名) 龍宮の姬神。●乙姬。

たつくり 田作(名) 干魚の一種。ごまめに同じ。

たつくり 調布(名) 手づから作りて纖精を極めたる布の意。◎つきのぬのてづくりに同じ。○拾遺愚草「たつくりやさらす垣根の朝露をつらぬきとめぬ玉川の里」

だつま 達磨(名) 數珠の本の處にある大粒の玉。○大鏡「だつまには大柑子をしたる御數珠」

たつまき 龍卷(名) 旋風の一種。水、樹木、家屋など卷き上げて柱の如く立ち登るもの。

たっぷり (副) 充分に。(俗)

だっこう 脫肛(名) 病の名。肛門の外に出づるもの。

たつごも 立薦(名) 上古室內の隔に薦莚を衝立の如く作りたるもの。

たつさはる 携(自動四段) (一)相携ふる。●手と手と取りかはす。●連れ立つ。○萬葉「わたつみの神の宮の。中の重の。妙なる殿に。たづさはり二人入りぬて」(二)其道に入る。●關係する。○宇治「弓矢に携はらん者何かは我身を思はん事は候はん」

たつさふ 携(他動下二段) 手に提げて行く。●手を引きて行く。

たつき 立木(名) たちきに同じ。地に立ちたる樹木。○新古今「古畑のそばの立つ木にぬる鳩の」

たつぎ 鐇(名) 木を切る斧の大なるもの。(和名抄)

たづき (名) たより。●よるべ。●たづき。○萬葉「みそらゆく雲も便と人はいへど家づとやらんたづき知らずも」

たつみ 巽(名) 方角の名。辰と巳との中間。すなはち東南の方。

たっし 達(名) 布達。●御觸。

たつじん 達人(名) 其藝術に堪能なる人。

たっしゃ 達者(名) (一)其技藝の熟したる人。●上手。(二)其事に敏捷なる事。又は其人。●敏腕。(三)壯健。●壯健なる人。

たつび (名) 貝の名。田螺の一名。

たっぴつ 達筆(名) 達者に書く事。

たっす 達(自動サ變) (一)屆く。●到着する。(二)熟練する。(三)官より通知する。●布達する。

だっす 脫(自動サ變) (一)漏れ落つる。●ぬくる。(二)逃ぐる。●脫走する。

たね 種(名) (一)草木の子の生ずべき本。(二)菓物の中にある硬きもの。(三)物事の出で來べき本。

たね 胤(名) 子孫の續き。

たねぼん 種本(名) 種として準據する書物。

たねちがひ 種違(名) 同母異父。

たねおろし 種下(名) 種を蒔く事。

たねがはり 種變(名) 同母異父。

たねがみ 種紙(名) 蠶の卵を生み附けさせたる紙。●蠶卵紙。

たねがしま 種子島(名) 〔一〕鐵砲の異名。〔二〕特には短銃。……◎我邦に始めて鐵砲の輸入されしは大隅の種子島を經てなれば云ふ。

たねん 多年(名) 長の年月。

たねん 他年(名) 後年。

たねん 他念(名) 他の念慮。●餘念。

たねまき 種蒔(名) 種を蒔く事。

たな 田菜(名) 草の名。蒲公英(たんぽ)の古名。(和名抄)

たな 店(名) もと棚に載せて物を賣りたるより云ふ詞。〔一〕みせ。商店。〔二〕貸店。●貸家。

たな 棚(名) 〔一〕板を渡して物を載する所。〔二〕井の左右の側に附きたる椽の如き板。

たなね (名) 一說には田中にある井。一說には稻の種を浸して置く井。○堀川百首「秋かりし室の小稻を思ひでゝ春ゐたなねに種をかしける」

たなばた 棚機。七夕(名) 〔一〕機織る事を司る神の名。〔二〕七月七日に祭らるゝ女性の星。●おりひめ。●織女。〔三〕世俗七月七日にする二星の祭。此夜天上にて牽牛星(男)と織女星(女)と夫婦相會するとて昔は禁中を始め家毎に執行せしもの。

たなばたづき 七夕月(名) 七月の異名。

たなばたづめ 七夕女(名) 織女の異名。●おりひめ。

たなばたまつり 七夕祭(名) 七月七日にする二星の祭。●乞巧奠。

たなばし 棚橋(名) 板にて棚の如く柱を立てゝ渡したる橋。○新續古今「山里の前の棚橋苦むしてゆきゝまれなる程ぞ知らるゝ」

たなはゝ 手繩(名) 鵜飼する時一方を鵜に結び附け一方を漁夫の手に取り持つ繩。○新千載「鵜舟さす夜川の手繩うちはへて」

たなおろし 棚卸(名) 商家の詞。總勘定。●決算。

たなかどり 田中鳥(名) 時鳥の異名。

たなかのるど 田中井戸(名) 催馬樂の曲名。

たなかのみよ 手長御代(名) 足長(たりなが)の御代の意。◎君が代を祝ひて言ふ詞。(祝詞式)

たなれ 手馴(名) 手馴るゝ事。○夫木「たなれの駒」

たなそこ 掌(名) たなごゝろに同じ。

たなつもの　（名）　田に作る穀物。●稻。

たなしをぶね　棚無小舟（名）　船棚の無き小舟。……棚とは舟の左右の側にある椽の如き板。○萬代「夕汐に棚なし小舟こぎいでゝ須磨の海士人釣垂れにけり」

たなうち　（名）　掌（たなうち）に同じ。（空穗）

たなぐもる　棚曇（自動四段）　雲の棚引きて曇る。●とのぐもる。○萬集「たなぐもり雪は降り來ぬ」

たなまた　手朕（名）　手の指の朕。

たなご　（名）　魚の名。鯛に似たる小魚にて海たなご川たなごの二種あり。

たなごひぃ　手拭（名）　手を拭ふもの。てぬぐひに同じ。○雅亮裝束抄「汗たなごひ」

たなごころ　掌（名）　てのひら。●たなうら。●たなそこ。

たなぎ　田水葱（名）　草の名。田に生する水葱。（雜馬樂）

たなぎる　棚霧（名）　たなびく。●たなぐもる。○萬葉「たなぎりあひ雪も降らぬか」

たなぎゃぎょう　棚經（名）　盆に僧の來りて精靈棚に向ひて讀む經。

たなしる　（他動四段）　唯知るの轉か。◎知る。○萬葉「家忘れ身もたなしらず」

たなじし　膜（名）　肉を包みたる薄皮。●まく。（和名抄）

たなひぢ　手肱（名）　肱に同じ。○祝詞式「手肱に水泡搔き垂り」

たなびく　棚引（自動四段）　雲霞などの横長き形に立つ。

たなもの　店者（名）　商家の雇人。

たなすゑ　手末（名）　手の先。●手首。○記「たなすゑに捧げて」

たら　鱈（名）　魚の名。北地の海に產して口大きく鱸に似たるもの。

たらひぃ　盥（名）　手洗ひの約。◎淺く造りたる桶。

だらに　陀羅尼（名）　梵語にて誦する一種の經文。（密教）

だらにすけ　陀羅尼助（名）　藥の名。黃蘗の皮などにて作りたる極めて苦きもの。

たらちね　（名）　父親。○壬二集「浮き世には身はみなしごとなりはてぬ我迷はすな法のたらち

たらちね を」
垂乳根(名)　母親。○夫木「たらちねの跡とて見れば小倉山昔の庵ぞ苔に殘れる」

たらちねの
垂乳根の(枕)　母または親の枕詞。○萬葉「たらちねの母のみこと」

たらちめ
(名)　たらちねに同じ。○千載「たらちめやとまりて我を惜まゝしかはるにかふる命なりせば」

たらちめの
(枕)　たらちねのに同じ。○仲文集「たらちめの昔の親の顔見れば」

たらちしの
(枕)　たらちねのに同じ。(萬葉)

たらはす
足(他動四段)　足らしむる。●滿たす。○祝詞式「横山のごと置き足らはして」

たらえふ
多羅葉(名)　唄多羅葉の略。

たらふ
足(自動四段)　足るの延音。

たらのき
(名)　木の名。枝なくして刺の多きもの。

たらじゅ
多羅樹(名)　印度に産する大木。其葉は即ち唄多羅葉にして經文など筆寫するもの。

たらす
(自動四段)　足るの敬語。(古口)

たらす
垂(他動四段)　垂れしむる。

だらすけ
陀羅助(名)　だらにすけに同じ。

たん
丹(名)　(一)繪の具の名。朱に似て黄色を帶びたるもの。(二)煉藥、丸藥などの稱。○「寶丹」「萬金丹」

たん
痰(名)　氣管より出づる一種の粘液。

たん
段(名)　(一)地面の廣さを測る詞。今は一町の十分一。昔は三百六十歩。(二)距離を測る詞。六十間の遠さ。

たん
反端(名)　織物長さをいふ詞。およそ二丈六尺。

たん
膽(名)　きも。●膽力。

たむ
回(自動四段)　陸に沿ひてめぐる。●めぐる。○萬葉「漕ぎたみゆきし棚なし小舟」

たむ
矯(他動下二段)　(一)物の曲りを眞直に直す。(二)惡しき風俗などを正し直す。●矯正する。(三)物事をじっとこたへて暫く待つ。

たむ
溜(自動下二段)　溜らしむる。●積み集むる。●充滿さする。

だん
緞(名)　種々の色の糸もて織りたる絹。●種々の色に染めたる絹布。●だんだらに染めたる絹布。○「紅緞」「棟緞」「櫨緞」

だん
壇(名)　一段高く作りたる場所。

だん
男(名)　(一)息子。(二)爵の名。男爵に同じ。

だん　段(名)　〔一〕階。●だんく。〔二〕等級。〔三〕文章の一切。〔四〕音樂などの一切。〔五〕芝居の一幕。〔六〕手紙の詞。●事。●旨。○「此段申上候」

だん　談(名)　はなし。●ものがたり。

だん　暖(名)　あたゝかみ。

だむ　訛(自動四段)　音聲のなまる。○今昔「東雁鳴きあひたるやうにて舌だみたるぼ」

だむ　(自動四段)　曇りたるやうの色になる。○著聞「だみたる料紙」

たんいつ　單一(名)　唯一。●簡單。△(形)—單一なる。(副)—單一に。

たむろ　屯(名)　〔一〕人の集り居る事。又は其所。●溜り。〔二〕特には陣屋。〔三〕特には現今の警察署。

だんろ　暖爐(名)　室内をあたゝむる火器。●ストウヴ。

たむろす　屯(他動サ變)　集り居る。●群集する。

だんぱん　談判(名)　掛合ふ事。△(動)—談判す。

たんぱく　淡泊(名)　輕く淡き事。●さっぱりしたる事。△(形)—淡泊なる。(副)—淡泊に。

だんぱしご　段階子(名)　階子の一種。板にて階段を造りたるもの。

たんに　單(副)　ひとへに。●一圖に。●唯。

たんにん　擔任(名)　擔當に同じ。

たんぼ　田圃(名)　田の畔道。

たんぽぽ　(名)　蒲公英(たんぽぽ)の略。

たんぽぽ　蒲公英(名)　草の名。野生にて春黄なる菊の如き花咲くもの。

だんばう　檀方(名)　檀家方。＝檀家に同じ。

たんたう　擔當(名)　其事の專任。●擔任。△(動)—擔當す。

たんたう　短刀(名)　短き刀。●懷劍。●匕首。●脇差。

たんちゝう　丹頂(名)　鶴の一種。頂赤くして美麗なるもの。

たんりょ　短慮(名)　短氣。●氣短。

たんりょく　膽力(名)　度胸。

だんりょく　彈力(名)　物理學上の詞。彈き返す力。

だんれう　暖寮(名)　轉宅祝。

だんりん　檀林(名)　寺の異名。

だんりう　暖流(名)　地理學上の詞。暖地より來る潮流。

だんをち　檀越(名)　檀家に同じ。

だんわ 談話(名) 話をする事。●物語。●話說。●會話。●對話。△(動)—談話す。

だんわ 暖和(名) よき程に暖き事。●溫暖。●溫和。(形)—暖和なる。(副)—暖和に。

たんか 短歌(名) 和歌の一體。三十一文字もてよみたるもの。●みじかうた。

だんか 檀家(名) 其寺の支配を受くる家。●檀方。●檀越。

だんがん 斷岸(名) 切り岸。●絕壁。

たんだい 探題(名) 〔一〕詩歌の題を鬮引にしてよむ事。〔二〕鎌倉足利の頃に置きたる一地方の警固使。

だんだら (名) 白と他の色とを一つ置にして大筋の段々を爲すやうにしたる模樣。

だんだん 段段(副) 漸々。●次第に。

たむだく 拱(自動四段) 手にて抱くの意。◎兩手に胸を抱くやうにする。●こまぬく。……無事にて手を休め居るさま。○萬葉「たむだきて我は遊ばむ」

たんそく 嘆息(名) 溜息を吐きて憂ひ嘆く事。●大息。△(動)—嘆息す。

だんつう 段通(名) 厚く作りたる毛織物の敷物。

だんねん 斷念(名) 思ひ斷る事。●あきらめ。△(動)—斷念す。

たんな (名) 手綱の轉。

だんな 檀那。旦那(名) 〔一〕梵語にて譯すれば施主の意と爲る。◎其寺に物を寄進する人。●檀家。〔二〕僕婢よりは主人。〔三〕妻よりは夫。

だんなでら 檀那寺(名) 菩提所に同じ。

たむらかに 屯(副) 屯を爲して。●群集して。(相模集)

だんらん 團欒(名) 親睦に集まり合ふ事。

だんらく 段落(名) 文章にていふ。文の大切目。

たむく 手向(他動下二段) たむけをする。

たんくわ 丹花(名) 赤き花。

たんぐわ 旦過(名) 旅僧の一宿する所。……轉じて旅宿の意に用ふ。◎翌旦發足して行き過ぐるの意。○謠曲「我等が私宅は旦過にて候。一夜を明かして御通り候へ」

たんぐわん 歎願(名) 事情を述べて願ふ事。●情願。△(動)—歎願す。

だんぐわん 彈丸(名) 鐵砲玉。

だんやく 彈藥(名) 彈丸と火藥と。

だんまつま 斷末魔(名) 人の將に死せんとする時。●最期。●今は。

たむけ 手向(名) 手に取りて向くるの意。◎神佛に物品食品など備ふる事。

たむけ 峠(名) 坂道の登りつめたる處。●たうげ。◎昔は峠に旅人の道中安全を祈るため神に手向する處ありしより起れる名。

たんけい 短檠(名) 低き燈臺。

だんけつ 團結(名) 同志の人々組み合ふ事。△(動)—團結す。

たんけん 探險(名) 危險の土地などに踏み入りて探究する事。△(動)—探險す。

だんげん 斷言(名) 斷然言ひ放つ事。△(動)—斷言す。

たむけのかみ 手向神(名) 旅人の道中安全を守る神。●道祖神。○萬葉「となみ山手向の神に幣まつり」

たむけぐさ 手向草(名) 手向くる物品。

たんご 端午(名) 五月五日の節句。

たんご 單語(名) まだ句を成さぬ簡單なる言語。

だんご 團子(名) 米の粉を丸めて作れる餅。

たんかこう 炭坑(名) 石炭の出づる鑛山。

だんかこう 斷行(名) 斷然決行する事。△(動)—斷行す。

だんこく 暖國(名) 氣候のあたゝかき國。

たんこぶ 痰瘤(名) 瘤。

たんてい 探偵(名) 內々に罪人など探り調ぶる事。又は其人。●探索。●隱密。

たんでん 丹田(名) 人體にて臍より少し下の所。○「丹田に氣を落ち附け」

たんざ 端座(名) 行儀正しく座する事。●正座。△(動)—端座す。

たんさく 探索(名) (一)搜索。●探究。(二)探偵。

たんざく 短册。短尺。短籍(名) (一)細長く切りたる紙。●紙札。(二)竪一尺一寸五分橫一寸八分に作りて短歌を書く紙。●たんじゃく。●たにざく。

たむざけ 甜酒(名) 上古甘く釀したる一種の酒。(紀)

たんき 彈碁(名) 古代遊戲の名。二人盤に對して黑と白と六箇づゝの碁石を並べ勝負を決するもの。

だんき 暖氣(名) 暖き氣候。

だんぎ 談義(名) 寺にてする說法。

だんきん　斷金(名)　〔一〕音調にて十二律の一つ。〔二〕朋友の交の深き事。

だんきん　段金(名)　緞子金襴の略。○條々聞書「段金一端」

たんめい　短命(名)　命の短き事。

たむし　田虫(名)　病の名。皮膚に小さき瘡を生じ全身にまでも蔓延するもの。

だんし　檀紙(名)　紙の一種。紙面に皺を寄せて和歌など書くに用ふる上品の紙。昔は檀の木の皮の纖維にて作れる故まゆみの紙と云ひ陸奥の地ことに名産なりし故みちのくにがみとも云へり。

だんし　男子(名)　〔一〕男。〔二〕男の子。〔三〕男らしき男。●丈夫。

だんじ　男兒(名)　だんしに同じ。

だんじり　樂車(名)　山車(だし)に同じ。

たんしょう　端緒(名)　いとぐち。●發端。

たんじゃうう　誕生(名)　〔一〕人類の生るゝ事。●出生。〔二〕誕生の時に當れる日。

だんじゃうう　彈正(名)　彈正臺の略。

だんじゃうたい　彈生臺(名)　古代役所の名。洛中を巡檢して風俗を矯め內外の犯罪者の糺彈の事を掌る處。官吏は尹、大弼、少弼、忠、疏あり。

たんじゃく　短册。短尺。短籍(名)　たんざくに同じ。

だんしゃく　男爵(名)　現今五爵の一つ。第五等に位するもの。

だんじき　斷食(名)　祈願の爲に食を斷つ事。△(動)—斷食す。

たんじゅう　短銃(名)　短小なる鐵砲。●ピストル。

だんびら　(名)　だびらひろに同じ。

たんもの　反物(名)　織物の總名。

たんせい　丹青(名)　〔一〕彩色。〔二〕彩色畫。

たんせい　丹誠(名)　眞心を盡す事。

だんぜつ　斷絶(名)　絶ゆる事。●廢絶。△(動)—斷絶す。

たんせん　段錢(名)　足利時代田壹段に付何程と割付け人民より取立てたる稅金。

だんぜん　斷然(副)　きっぱりと。●思ひ切って。

たんせき　旦夕(名)　切迫したる場合にいふ詞。朝か夕暮での短き時間。

たんす　簞笥(名)　引出しにて成り立ちたる箱。

たんず　歎(自動サ變)　歎く。●歎息する。

たんず　彈(他動サ變)　琴の類を彈く。●奏づる。●搔き鳴らす。

だんず　談(他動サ變)　〔一〕話す。〔二〕談判する。●掛合ふ。

たふ　堪。耐。任(自動下二段)　〔一〕其事を爲し得る。〔二〕忍ぶ。●忍耐する。

たふる　斃(自動下二段)　〔一〕立ちたるもの〻横に臥す。〔二〕斃れて死ぬる。

たうた　田歌(名)　田植歌に同じ。(雅)

たうたどり　田歌鳥(名)　時鳥の異名。

だうま　駄馬(名)　荷付け馬。

たうゑ　田植(名)　六月頃稻の苗を田に植うる事。

たうゑうた　田植歌(名)　田植の時に早乙女の唄ふ歌。●田歌。

たふす　倒。斃(他動四段)　たふれしむる。

たのむ　(名)　田面に同じ。○伊勢「たのむの雁」

たのむ　賴(他動下二段)　賴みにさする。●あてにさする。……我の彼をして我を賴ましむるの意。又彼の我をして彼を賴ましむるの意。○後拾遺「人の(我を)たのめて來ず侍りければ」山家集「紅葉見し交野の峯の花盛たのめぬ人の待たるゝやなう」

たのむ　賴(他動四段)　〔一〕たよりにする。●依賴する。〔二〕他人に託して物事を任する。

たのむのせっく　(名)　田の實の節句の意。◎德川時代八朔の祝日。

たのう　多能(名)　藝能の多き事。●多藝。△(形)—多能なる。

たのうだおかた　(名)　たのうだひとに同じ。敬語にいふ時。

たのうだひと　(名)　我賴とする人の意。◎主人。……足利時代の詞。

たのうだもの　(名)　たのうだひとに同じ。他人に對して我主人を稱ふる時。

たのくさ　田草(名)　田に生ゆる雜草。

たのごひぃ　手拭(名)　てぬぐひの古名。(榮花)

たのき　(名)　田の際。○新六帖「雨すぐる田のきの小魚の水たまり有りはつまじき世をいかにせん」

たのみ　賴(名)　賴む事。●たより。●あて。

たのみ　田實(名)　米。

たのし 樂(形。形狀言シク活) うれし。●よろこばし。●愉快な。●物思の無い。●氣樂な。

たのしむ 樂(自動四段) 〔一〕樂しく思ふ。〔二〕興味を感ずる。●あぢはふ。●好む。●嗜む。

たのしぶ (自動四段) たのしむに同じ。

たのしみ 樂(名) 樂しむ事。●愉快。●快樂。

たのしび (名) たのしみに同じ。

たのも 田面(名) 田のおもて。●田。

たのもし (形。形狀言シク活) 頼みに思はるゝ有樣。●希望のある有樣。

たく 鐸(名) 手に持ち振鳴らす鉦。〔圖〕

たく 栲(名) たへに同じ。楮の皮。又之にて織りたる布。

たく 宅(名) 其人の家。

たく 卓(名) 高き机。●テーブル。

たく 闌。長(自動下二段) 〔一〕時刻の移る。○「日たけて」「更たけ夜靜なり」〔二〕時候の深くなる。○「春過ぎ夏たけて」〔三〕齡の長する。〔四〕草の長くのびる。○「春野の蕨や〜たけて」

たく 焚(他動四段) 〔一〕燃やす。●燒く。〔二〕炊く。

たぐ (他動下二段) たぐる。●手に取り上ぐる。○萬葉「妻もあらば取りて(夫の死骸を)たけまし」

たぐ (他動四段) 髮などを搔き上ぐる。●繩などを繰り寄する。●たぐる。○萬葉「たけばぬれたがねば長き妹が髮」

だく 抱(他動四段) いだくに同じ。(俗)

たぐひ 類(名) 比類。●同類。●類似。

たぐろ 田畔(名) 田のあぜ。○長能集「山賤のたぐろに立てる女郎花」

たくはつ 托鉢(名) 僧徒の鐵鉢を携へて米錢を乞ひあるく事。△(動)—托鉢す。

たくち 宅地(名) 家を建つる地面。●屋敷。

たぐち 田口(名) 田の入口。○夫木「山陰の田口に立てる女郎花」

たぐり (名) 嘔吐。●へど。(記)

たくぬの 栲布(名) 牛の皮の纖維にて織りたる布。

たぐる 手操(他動四段) 手にて操り寄する。

だくおん 濁音(名) 〔一〕濁りたる音響。〔二〕語學上の詞。がぎぐげござじずぜぞだぢづでどばびぶべぼの音。

たくはふ 貯。蓄(他動下二段) 保存し置きて後日の

たくはへヱ　貯(名)　貯ふる事。●貯へたるもの。

だぐわし　駄菓子(名)　下等なる菓子。

たくだし　鑿駝師(名)　植木屋の異名。

たくづぬの　(枕)　〔一〕栲綱の意。栲の皮にて作れる綱は白きものなれば其枕詞とす。○記「たくづぬの白きたゞむき」〔二〕又長きにも掛けていふ。○萬葉「たくづぬの長き命を」

たくなはワ　栲縄(名)　栲の皮の纖維をもて綯ひたる縄。長きものなれば千尋などいふ詞の形容に用ふる事多し。(萬葉)

たくなむ　(他動四段)　巧むに同じ。惡事を企つる。

たくらだ　(名)　たばけもの。(人唐記)

たくらぶ　競(他動下二段)　くらぶる。●比較する。

たくむ　巧(他動四段)　工夫する。●趣向する。●企つる。●設計する。●計畫する。

たぐふワ　類(他動下二段)　たぐはしむる。●同一に爲す。●いつしょにまぜる。○新續古今「心をば君にたぐふる旅なれば我も留まる心地やはする」

たぐふワ　類(自動四段)　〔一〕同類になる。〔二〕同一になる。●いつしょにまじる。○貫之集「千世までの雪かと見れば松風にたぐひて田鶴の聲ぞ聞ゆる」

たくまし　逞(形。形狀言シク活)　太く強し。●勢の盛なる。

たくましうす　(他動サ變)　盛にする。●恣にする。

たくけん　卓見(名)　すぐれたる見識。

たくぶら　(名)　肩と臂との間。●腕。○紀「たくぶらに虻かきつきつ」

たくぶすま　栲衾(名)(枕)　栲布にて作れる衾。白きものなれば「しろしらなどの」枕詞とす。○萬葉「栲衾しらきの國」

たくあん　澤庵(名)　糠と鹽とにて漬けたる干大根の香の物。◎一説には澤庵和尚の漬け始めたるものとも云ひ。又ば石を重しに置きたる形が澤庵和尚の墓に似たる故の名とも云ふ。

たぐさ　田草(名)　田の草。○萬代「田草引く岡の卯の花ちるまでに猶聲しのぶ時鳥かな」

たぐさ　手草(名)　舞を舞ふ時手に持つ枝。○記「香山の笹の葉を手草に結ひて」

たぐさづき　田草月(名)　陰暦五月の異名。

たくさん 澤山(副) 多く。●たんと。●充分。

たくめ 事女(名) たうめに同じ。老女。(紀)

たくみ 内匠(名) 内匠寮の略。

たくみ 工(名) 〔一〕工業。●職工。〔二〕大工。(雅)

たくみ 巧(名) 巧む事。●工夫。●趣向。

たくみに 巧(副) 手際よく。●上手に。●巧者に。

たくみどり 巧鳥(名) 島の名。鷸鷸の種類。(和名抄)

たくみれうう 内匠寮(名) 古代中務省に屬して禁中の木工修理の事および御即位元日等の儀式に高御座を裝ふ事を掌る役所。官吏は頭、助、允、屬あり。

たくみづかさ 内匠寮(名) たくみれうに同じ。

たくみのかみ 内匠頭(名) 古代官名。内匠寮の長官。

たくじり 手抉(名) 太古の土器。土を捏れ手先にて皿の形にしたるもの。

たくしょ 謫所(名) 罪人の流されたる所。●配所。

だくしゅ 濁酒(名) にごりざけ。

たくひれ 栲領巾(名) 栲布にて作れる領巾。(古)

たくひれの 栲領巾(枕) 栲領巾は白きもの又懸くるものなれば其等の詞の枕詞とす。○萬葉「たくひれの白濱波の」同「たくひれのかけまくほしき」

たくぜつ 卓絶(名) 多くの中に拔きんづる事。△(動)卓絶す。

たくせん 託宣(名) 神の告。●神託。

たくす 托(他動サ變) 賴む。●まかす。

だくす 諾(他動サ變) うけがふ。●承諾する。

たや 田屋(名) 田中に作れる小屋。

だや 駄屋(名) 牛馬を飼ふ小屋。

たやす 絶(他動四段) 絶ねしむる。

たやすし 絶(形。形狀言ク活) 手輕し。●容易なる。●無造作なる。

たま 魂。靈(名) 〔一〕たましひ。●精神。〔二〕靈魂。●魂魄。●神靈。

たま 玉。珠(名) 〔一〕寶玉類の總名。〔二〕總べて球形のもの。〔三〕彈丸。

たま 玉(形) 玉にて作れる。●玉もて飾れる。●玉の如き。●美しき。○「玉櫛笥」「玉手箱」

たまひ 田舞(名) 上古の舞樂の一種。(紀)

たまひ (名) 嘔吐。●へど。(和名抄)

たまいる (自動四段) たまぎるの音便。○謠曲「おびねたまいらせ給ふ事も」

たまゐる　玉居(自動一段)　玉の如くに居る。○新續古今「雨ふりて玉ゐる露を蓮葉の花の光と思ひけるかな」

たまばはゝき　玉箒(名)　玉もて飾りたる美しき箒。昔し正月初子の日に靈飼ふ屋を掃きて祝ひたるもの。

たまはやす　(枕)　武庫の枕詞。玉の如く愛で囃さゝ智の意。○萬葉「玉はやす武庫のわたりに」

たまはし　玉橋(名)　橋の美稱。(歌詞)

たまに　(副)　たまたま。●稀に。

たまぼこ　玉鉾(名)　〔一〕玉もて飾れる鉾。(傳事記)〔二〕枕詞より出でたる詞。◎道。○順集「世の中を何にたとへんうたゝねの夢路ばかりに通ふ玉鉾」

たまぼこの　玉鉾の(枕)　道の枕詞。鉾の身とかゝる意とも云ひ。又は鉾の柄にちないふ處ありてそれにかゝる意とも云ふ。○萬葉「玉鉾の道ゆく人も」

たまとり　弄丸(名)　古代の演藝。今の手品の類。

たまどの　靈殿(名)　靈屋に同じ。(榮花)

たまちる　玉散(自動四段)　玉の如き粒をなして散る。●玉の如き光を放ちて散る。○「玉散る水」「玉散る劍」

たまちはふ　靈幸(自動四段)(枕)　神が人に幸福を與へ給ふ。●人の命を幸福に保ち給ふ。……轉じては神の枕詞にも用ひたり。○萬葉「靈幸ふ神も我をば打棄こそしゐや命の惜しけくもなし」

たまり　溜(名)　〔一〕溜る事、又は溜り居る所。〔二〕人の溜り居る室。●扣所。

たまりのま　溜間(名)　德川時代江戸城にて將軍家の親族又は譜代大名の出仕したる詰所。

たまる　溜(自動四段)　集まり積る。●流れずして一所に留まる。

だまる　默(自動四段)　物を言はぬ。●默する。

たまはる　賜(他動四段)　賜ふ。……受くる人の方に附きて云ふ詞。●拜受する。●頂戴する。

たまはす　賜(他動下二段)　賜ふに同じ。いよ〳〵敬語にして云ふ詞。……吳るゝ人の方に就きて云ふ。○源氏「いとゞあはれと御覽じて云々上局にたまはす」

たまかつら　玉桂(名)　月の異名。

たまかづら

たまかづら

玉鬘(名)　上古の髪飾の一種。玉を緒に貫きたるもの。

玉鬘(枕)　光のきら〳〵する故に影に續け。髪に懸くる故に懸くに續けたる枕詞。○萬葉「玉鬘影に見えつゝ」同「玉鬘かけぬ時なく」

たまかづら

たまかづら

玉葛(名)　蔓草の美稱。(歌詞)

玉葛(枕)　葛の蔓の緣にて絶えずとほなかにはへてなどの枕詞。○萬葉「玉葛たえぬものから」同「玉葛いや遠長く」同「玉葛はへてしあらば」

たまかつま

たまかつま

玉勝間(名)　かつまの美稱。❷籠。(雅)

玉勝間(枕)　かつまは蓋と實のある籠ゆゑ合ふの意にて逢ふあべなどに續けたる枕詞。また目の堅く締まりたる意にて島にも續けたり。○萬葉「玉勝間安倍島山の」同「玉勝間島熊山の」

たまがき

たまがきの

玉垣(名)　(一)神社の垣。(二)墓地の一名。

玉垣の(枕)　垣の内の意味にて内に續く枕詞。○謠曲「玉垣の内外の神の」

たまがしは

玉柏(名)　柏の木を美稱して云ふ詞。(催馬樂)

たまがしは

玉堅磐(名)　石の美稱。○夫木「知らせばや思ひ入江の玉がしは舟さす棹の下にこたへて」

たまよばひ

たまだれ

たまだれの

魂喚(名)　死人の靈魂を喚び戻す事。

玉簾。玉垂(名)　たますだれに同じ。

玉簾の。玉垂の(枕)　玉簾の緒といふ意にてたの文字に續けたる枕詞。○古今「玉だれの小瓶やいづら」

たまだな

たまたま

たまだすき

靈棚(名)　盆に靈祭をする棚。❷精靈棚。

偶(副)　たまに。❷稀に。❷たまさかに。

玉襷(名)　玉もて飾りたる襷。❷又襷の美稱。(歌詞)

たまだすき

玉襷(枕)　襷を懸くと言ひ掛けたる枕詞。又古の襷は頂より懸けたればうなを轉じてうれに續けたる枕詞。○萬葉「玉だすきかけのよろしき」同「玉だすきうねびの山の」

たまつばき

玉椿(名)(枕)　椿の美稱。葉の綠の變らぬものなればかばらぬの枕詞にも用ふ。○謠曲「八千代をこめし玉椿かばらぬ色を賴みけるに」

たまつくり
たまづさ

玉造(名)　玉を造る工人。●玉すり。

玉梓。玉章(名)　文。○後拾遺「薄墨に書く玉章と見ゆるかな霞める空に歸る雁金」

たまづさの

玉梓の(枕)　使の枕詞。上古には玉を附けたる梓の木を使のしるしに持ち行きたる故の詞とも云ひ。一説には玉を飾れる梓弓を使の携へたるに起れりとも云ひて詳ならず。○萬葉「玉梓の使のいへば」

たまむかへどり
たまむし

魂迎鳥(名)　時鳥の異名。

玉虫(名)　〔一〕虫の名。甲あり六足にして最も美しき色澤を有するもの。〔二〕染色の名。玉虫の羽の如き色澤ある綠色。

たまむすび

魂結(名)　身體を離れ出でたる魂を結び留めて鎭むる一種の呪ひ。(伊勢)

たまもふ

賜。給(他動四段)　目下の人に物を與ふる。●取らする。●下賜する。

たまもふ

給(助動下二段)　人と對話する時。自身に附きたる動詞に添ふる卑下の詞。○源氏「主の娘ども多かりと聞き給へて」同「人にも漏らさじと思ひ給ふれば」

たまもふ

給(助動四段)　他人に附きたる動詞に添ふる敬語。○「行き給ふ」「語り給ふ」

たまのを

玉緒(名)　〔一〕玉を貫きたる緒。〔二〕命の異名。

たまのおんかうぶり

玉御冠(名)　玉の冠の尊稱。(中務日記)

たまのをの

玉の緒の(枕)　玉の緒は長きもの。絕え易きもの。亂れ易きもの。間を置かず繁く貫きたるもの。つぎ(續)てあるもの。故に是等の意味の詞に掛けたる枕詞。○萬葉「玉の緒の長き春の日」同「玉の緒の絕えたる戀の」同「玉の緒の思ひ亂れて」同「玉の緒の間も置かず」同「玉の緒のつぎてはいへど」

たまのよどの

靈夜殿(名)　亡者の靈を夜祭る所。○榮花「ありとてや人は訪ふらん送り置きし靈の夜殿に添ひにしものを」

たまのかうぶり

玉冠(名)　冕冠に同じ。

たまくら

手枕(名)　手を枕として寢る事。(雅)

たまぐし

玉串(名)　〔一〕幣を附けたる榊。神前に手向くるもの。〔二〕榊の一名。○新古今「ぬれてほす玉串の葉の露霜に天照る光いくよへぬ

たまくしろ

らん」

玉釧(枕)　玉は美稱。釧は手に纏くものなればまく又は手に取り持つに續けたる枕詞。○萬葉「玉くしろまき寢し妹」

たまくしげ

玉櫛笥(名)　玉もて飾りたる櫛箱。●又は櫛笥の美稱。

玉櫛笥(枕)　櫛笥の明く開く實蓋奥(底の意)などゝ續く枕詞。○萬葉「玉くしげ明けん明日の日」同「玉くしげみむろの山の」同「玉くしげ二上山に」

たまや

靈屋(名)　死人の靈魂を祀る所。

たまやなぎ

玉柳(名)　柳の美稱。(催馬樂)

たまつ

玉松(名)　松の美稱。(萬葉)

たまつり

靈祭(名)　死人の靈魂を祭る事。……昔は專ら十二月晦日に執行し。今は七月の盆に多く之を行ふ。

たまつる

靈祭(自動四段)　たまつりをする。

たまま

玉卷(自動四段)　草の若葉の玉の如くに卷かれてある。○「玉まく葛」「玉まく芭蕉」

たままき

玉卷(名)　玉卷く事。●玉卷きたるもの。

たまご

卵。玉子(名)　〔一〕魚又は鳥の子のまだかへらぬもの。〔二〕特には鷄の卵。●雞卵。〔三〕玉子なり。〔四〕玉子色。

たまごいろ

玉子色(名)　雞の玉子の如き色。●薄黄色。

たまごなり

卵形(名)　雞卵の如き形。

たまごすげ

玉小菅(名)　菅の美稱。(歌詞)

たまえぐさ

玉江草(名)　菖の異名。

たまで

玉手(名)　手の美稱。多く女の手を云ふ。(記)

たまてばこ

玉手箱(名)　玉を飾れる手箱。

たまあふ

(自動四段)　魂の相合ふ。●意氣相投ずる。●親しむ。(雅)

たまさか

(副)　まれに。●たまに。(又)―たまさかに。

たまざん

珠算(名)　算盤にて行ふ算術。●和算。

たまき

手纏。環(名)　上古の裝飾品。手に纏きたる輪形のもの。多く玉などを着く。●手結。

たまきはる

(枕)　内命世に續く枕詞。その意は古來諸説あれど詳ならず。○萬葉「玉きはる内の大野」同「玉きはる命をしけど」同「玉きはるいく世經にけむ」

たまぎぬ

珠衣(名)　衣の美稱。(萬葉)

たまぎる

(自動四段)　魂切るの意。恐れ驚きなどして氣を失ふ。

たまゆら（副）〔一〕ゆらめく玉。○「露の玉ゆら」〔二〕暫時。●數分間。○風雅「露しげき鳥羽田の面の秋風に玉ゆらやどる宵の稲妻」●（又）―玉ゆらに。△（形）―玉ゆらの。

たまみづ　玉水（名）〔一〕玉の如くに垂るゝ雨雪などの雫。○新古今「つくづくと春のながめのさびしきはしのぶにつたふ軒の玉水」〔二〕玉の如くに散る瀧の水。（謠曲）

たましひィ　魂（名）〔一〕生活せる肉體に宿りて死すれば幽界（天または黄泉）に至るといふ一種靈妙の物。●心。●靈魂。●魂魄。〔二〕氣力。〔三〕主眼。

たましろ　靈代（名）神佛の靈の目印として祭るもの。

たましづめ　魂鎭（名）身體を離れ出でたる魂を鎭めて本に復らしむる呪ひ又は祈禱。

たましづめのまつり　鎭魂祭（名）天皇の御代を祝ひ其御魂を鎭め奉る祭。禁中に於て十一月中の寅の日に行はるゝもの。●ちんこんさい。

たまも　玉藻（名）玉の如き實のなる藻。（萬葉）

たまも　玉裳（名）裳の美稱。（萬葉）

たまもよし（枕）讃岐（國名）の枕詞。意は詳ならず。

たまもなす（萬葉）玉藻成（副）玉藻の如く。○萬葉「玉藻なす浮べながせれ」同「玉藻なす依り寐し妹を」同「玉藻なす靡き寐し兒を」

たまもの　賜（名）賜はりたる物。

たまもひィ　玉盌（名）盌の美稱。

だます　騙（他動四段）欺く。

たますり　玉磨（名）玉を磨る工人。●玉作り。

たますだれ　玉簾（名）玉もて飾りたる簾。●又簾の美稱。

たけ　丈（名）〔一〕物の總べての高さ。●又總べての長さ。〔二〕ありたけ。●殘らず。○「心のたけ」

たけ　竹（名）植物の名。管の如く中空にして眞直に延び節あるもの。

たけ　茸（名）菌の總名。松茸、椎茸の類。

たけ　嶽（名）高く險しき山。

たけ　他家（名）他人の家。

だけ　丈（助名）〔一〕のみ。●限り。●ばかり。〔二〕ほど。●くらゐ。（俗）

たけい　多藝（名）藝能の多き事。●多能。（形）―多藝

なる。（副）―多藝に。

たける 梟帥（名）　一部族の人民の長。（俗）酋長。（古）

たける 梟（自動四段）　猛き振舞を爲す。

たけを 猛夫。武夫（名）　猛き男。

たけがり 茸狩（名）　野山に出でゝ菌を取る事。おもに初茸、松茸の類。

たけかはゥ 竹河（名）　催馬樂の曲名。

たけたば 竹束（名）　竹を束ねて弓の矢の防とする武器。〔圖〕

たけだち 丈立（名）　立ちたる時の丈の高さ。○源氏「舞人は衛府の佐どもの形清げにたけだちひとしき限をえらせ給ふ」

たけだけし （形。形狀言シク活）　猛しに同じ。（俗）強し。（俗）雄々し。

たけたびし 武田菱（名）　紋の名。武田信玄の家にて用ひしもの。〔圖〕

たけそかに （副）　たまさかに。（俗）稀に。○萬葉「玉敷きて待たましよりほたけそかに來たる今宵し樂しく思ほゆ」

たけなはゥ 酣　眞盛。（俗）最中。（形）―たけなはなる。（副）―たけなはに。

たけなが 丈長（名）　紙の名。奉書の類。

たけながし 竹流（名）　竹に流し込みたる金銀。昔し貨幣に代用したるもの。

たけんたけうンま 他見（名）　他人の見る事。（俗）他人に見する事。

竹馬（名）　竹を馬の如くにして乘りあるく小兒の遊戯品。

たけのは 竹葉（名）　さゝに同じ。酒の異名。

たけのその 竹園（名）　親王の異名。◎史記の世家に於レ是孝王築二東苑三百餘里一。注に在二宋州宋城縣東南十里一。俗人言二梁孝王竹園一とあるより出でたる故事。（雅）

たけのこ 筍。竹子（名）　竹の芽生。（俗）たかむな。

たけのみやこ 多氣都（名）　昔し伊勢國多氣郡にありし齋宮の御在所。

たけやり 竹槍（名）　竹を尖らして槍の如く作りたるもの。

たけますらを 猛丈夫（名）　猛き大丈夫。

たけぶ （自動四段）　〔一〕たけるに同じ。〔二〕叫ぶに同じ。（古）

たけし 猛（形。形狀言ク活）　強し。（俗）えらし。（俗）勇ま

し。●雄々し。

たけすがき 竹簀垣(名) 竹の簀にて作れる垣。○夫木「冬來てはあれどが閨の竹すがき幾夜寐覺の風か寒けき」

たふ 太布(名) 楮にて織りたる布。

たぶ (他動下二段、古は四段) 食ふに同じ。

たぶ (他動四段) 賜ふに同じ。

たぶ (助動四段) 敬語。=給ふに同じ。○「仰せたぶ」「聞きたぶ」

たぶる (自動下二段) 狂する。●たはける。(萬葉)

たぶね 田船(名) 田に浮ぶる一種の小舟。

たぶらかす 誑(他動四段) だます。●ばかす。

たぶん 他聞(名) 他人に聞かるゝ事。●外聞。

たぶん 多分(名) 分量の多き事。

たぶん 多分(副) 大概。●大抵。●十の八九まで。

たぶて (名) 礫(つぶて)に同じ。●石投げ。○落窪「たぶてな雨の降るやうに車に投げかけて」

たぶさ (名) 髻。

たぶさ 手拳(名) 手首。●手節。○堀川「衣打つ槌の音こそたゆむなれたぶさに霜の置くにやあるらん」

たぶさき 褌(名) 猿股引。●猿股。○宇治「眞裸にてたぶさきばかりをして」

たぶみ 田文(名) 田の券。●田地の圖面。

たぶし 手節(名) 手の節の處。●手首。●たぶさ。

たぶせ 田伏(名) 田の中にある伏屋。(萬葉)

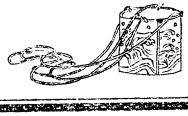
たこ 蛸(名) 海産動物の名。●烏賊に似て頭丸く足太く且つ疣あるもの。

たこ 凧(名) いかのぼりの一名。

たこ (名) 馬の病の名。脊に生ずる瘡。(和名抄)

たご 田子(名) (一)田植をする人。●田を作る人。●農夫。●百姓。(二)水、汐、肥料など汲みて運ぶ擔ひ桶。(三)能樂の道具。田子の形に擬したるもの。〈圖〉

たこつぼ 蛸壺(名) 蛸を漁するに用ふる土製の壺。之を海中に沈め置き蛸の入るを待ちて捕るもの。



たごん 他言(名) 他人に語る事。△(動)—他言す。

たこむら 手腓(名) たくぶらに同じ。(記)

だがう 駄囮(名) 旅の食料。

たかうな (名) たかむなの音便。◎筍。

たこく 他國(名) 生國の外の國。●我住む土地より外の國。●外國。

たこぶね 蛸船(名) 海産動物の名。形は蛸に似て薄き殼を有し船の如くにして海上を走るもの。

たごし 手輿(名) 乘物の名。肩に載せずして腰の邊にて舁く輿。●腰輿。○增鏡「いとあやしき御手輿にて下らせ給ふ」

たへェ 妙(名) すぐれたる事。●面白き事。●優美なる事。△(形)—たへなる。○古今序「山部の赤人といふ人ありけり。歌にあやしく妙なりけり」(副)—たへに。○今昔「蟬丸琵琶をなん妙に彈く」

たへェ 拷。妙(名) 〔一〕 上古織物の名。楮(かぢ)の皮の纖維にて織りたる布。〔二〕轉じては唯織物の總名。

たえたえ 絶々(副) 切れ〳〵。●ちぎれ〳〵。●とぎれ〳〵。○源氏「心細けなる御聲たゆ〳〵聞えて」(又)—たゆ〳〵に。△(形)—たゆ〳〵の。(又)—たゆ〳〵なる。

たえたえし (形。形狀言シク活) たえ〳〵なる有樣。(撰集抄)

たへェ**なるはな** (名) たへなるのりのはなに同じ。○散木「色々に妙なる花の散りいひは天のみそらやまだらなるらん」

たへェ**なるのり** (名) 妙法の譯語。妙法蓮華經に說きたる佛の教。○新續古今「荒き海さびしき山の中なれど妙なる法は隔てざりけり」

たへェ**なるのりのはな** (名) 妙法華の譯語。……たへなるのりに同じ。○十六夜日記「たのもしな身に添ふ友となりにけり妙なる法の華の契は」

だえん 楕圓(名) 圓形を少し長くしたるもの。●いびつ。●小判形。(形)—楕圓なる。(副)—楕圓に。

たえま 絶間(名) 絶ねたる間。●切れ目。

たへェ**こもる** 堪籠(自動四段) 不自由徒然を堪へ忍びて山里などに引き込む。(雅)

たえて (副) 離れ切って。●一向に。●まるで。●とんと。●さっぱり。○源氏「その御いらへはたえてせず」

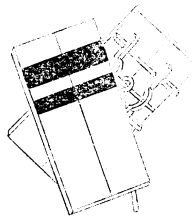
たえす 絶(自動サ變) 絶ゆに同じ。○清正集「人知れぬ音やは絶えする時鳥」

たえず (副) 絶間なく。◎不斷に。

たて 竪(名) 上下に通りたる筋。◎横と十文字を爲したる筋。

縱(名) 機の竪筋。

たて 楯。干。盾(名) 武器の名。手に携へ又は地上に立てゝ矢玉を防ぐもの。多く板にて作る。



〔圖〕

たて 簞(名) たちに同じ。屋形。

たで 蓼(名) 草の名。藍に似て水邊に生じ葉は辛味あり。食用となるもの。

だて (名) 華美。◎豪奢。◎はで。(形)—だてな。(副)—だてに。

たていと 縱糸(名) 機の竪の糸。

たえいる 絶入(自動四段) 氣絶する。◎息を引き取る。

たていた 立板(名) 眞直に立てたる板。

たていし 立石(名) (一)庭園の裝飾に立て置く石。○源氏「木立立石前栽などの有樣」(二)指示などの文字を彫りて路傍などに立ておく石。

たてば 立場(名) 道中の人足車夫などの休息場。

たてぬき 經緯(名) 機糸の竪と横と。◎物の筋目の竪と横と。

たてわき 立涌(名) 模樣の名。たちわきに同じ。

たてばき 帶刀(名) たちはきに同じ。

たてかふ 立替(自動下二段) 代りて支拂する。

たてかく 立掛(他動下二段) もたらせて立つる。

たてかへ 立替(名) 立替ふる事。

たてがさ 立傘(名) 德川時代公卿大名の行列に槍の如く立てゝ持たせたる袋入長柄の傘。〔圖〕

たてがみ 鬣(名) 馬の髮。◎たちがみ。

たてたてし (形。形狀言シク活) 腹立て易し。○沙石集「腹あしくたてぐしかりけるが」

たてつけ 立付(名) 戸障子などの閉ち目。

たでながし 蓼流(名) 川にて魚を捕る時に蓼の汁を絞りて流す事。○新六帖「み山川のぼる小鮎の蓼流しからくも濁る世に生れけん」

だてら (副) 名詞に添へて用ふる詞。◎の癖に。◎の身分として。○狹衣「法師だてらかくあな

たてぐ
たてくび
建具(名)　家に建つる戸、障子の類。
立首(名)　頸の後の部分。○「立首つかんで引き出だし」

たてやま
たてまだす
(名)　伐木禁止の山。☆止め山。
(他動四段)　たてまつるに同じ。○高光集「忠清の衛門督五節たてまだし給ふに」

たてまつる
奉(他動四段)　(一)貴人に物を贈る。☆献上する。☆進上する。(二)着せ奉る乘せ奉るの意。☆めさする。☆めす。○源氏「御直衣奉り引きつくろひて」同「御車に奉るほど」

たてまつる
奉(他動下二段)　奉らしむの約。◎常にたてまつれと用ひて貴人の所爲に云ふ詞。○源氏「御文はたびく(光源氏より紫上に)奉れ給ふ。暮るれは例の惟光なぞ奉れ給ふ」

たてまつる
奉(助動四段)　他人に對して我方の動詞に添ふる敬語。○「御機嫌伺ひ奉る」

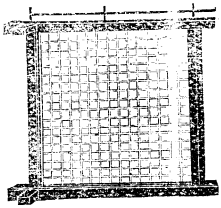
たでふ
たてふだ
蓼斑(名)　青みがゝりたる鷹の羽色。
立札(名)　道端に立てゝ掲示する札。☆高札。

たてぶみ
立文(名)　全紙に書きたる儀式的の書狀。……結び文などに對して云ふ。○源氏「紫の紙たてぶみすくよかに藤の花につけ給へり」

たてこもる
たてゑぼし
(自動四段)　籠城する。
立烏帽子(名)　烏帽子の一種。風折烏帽子の如く折らずして上に立てたるもの。直衣・狩衣などの時おもに着る。〔圖〕

たてあかし
たてあかし
蓼藍(名)　染色の名。=藍に同じ。(和名抄)
立明(名)　たちあかしに同じ。松明。……但し手に執らず立て置きて燃やすもの。(和名抄)

たてじとみ
立蔀(名)　蔀を衝立の如くしたるもの。○枕「立蔀明いたる陰の方に添ひ立ちて」〔圖〕



たてもの
建物(名)　建築したる家屋類の總名。

たてもの 立物(名) 〔一〕埴輪。〔二〕前立。

だざいふ 太宰(名) 大宰府の略。

太宰府(名) 古へ筑前の國に置きて九州の政事兵事を管し專ら外患に備ふる官廳。官吏は帥、權帥。大貳、小貳、監、典あり。又祭祠の事を掌るものを主神と云ふ。◉おほいみこともちのつかさ。

たざく (名) 短册の署。

たき 瀧(名) 高き所より急に落つる川。◉瀑布。◉たんきるみ。◉急流。◉早瀨。

たぎ (名) 彈碁の略。

たきどの 瀧殿(名) 瀧を見るやうに造りたる家。(雅)

たぎる (自動四段) 〔一〕たぎつに同じ。〔二〕沸騰する。

だきかご 抱籠(名) 夏の夜涼味を得るために抱いて寐る竹の籠。一名竹婦人。

たぎゃう 他行(名) 他所に行く事。◉他出。◉外出。

△(動)—他行す。

たきだきし (形。形狀言シク活) 高低ある惡しき道の有樣。(常陸風土記)

たきつ 瀧つ(自動四段) 瀧となりて流るゝ。又は湧く。◉瀧の如く流るゝ。又は湧く。○萬葉「今ゆきて聞くものにもか飛鳥川春雨ふりて瀧つ瀨の音を」古今「瀧つ心をせきかねつる」

たきつぼ 瀧壺(名) 瀧の水の落ち込む凹き所。

たきつく 焚付(他動下二段) 燃ゆる樣にする。

たぎつせ 瀧津瀨(名) 瀧の瀨。(雅)

たぎらかす (他動四段) たぎらしむる。

たきぐち 瀧口(名) 藏人所に屬して禁中を警衛する役。武勇に堪へたる輩之に輔す。

たきまくら 瀧枕(名) 瀧の響を枕邊に聞く事。○堀川「山里は寐覺の床のさびしきにたえず音なふ瀧枕かな」

たぎふさ (名) たぶさに同じ。髻。(紀)

たきあかし 焚明(名) 松明。○紫日記「たきあかしの光の心もとなければ」

たきさし (名) 半分燃えて消えたる薪。

たきぎ 薪(名) 火を焚く木。◉眞木。◉燃料。

たきぎつく 薪盡(句) 佛の入滅を火の消ゆるに喩へて云ふ。◎法華經序品に。佛此夜滅度如二薪盡火滅一○後拾遺「常よりも今日の霞であはれなる薪つきにし名殘と思へば」

たきぎのう　薪能（名）　奈良興福寺にて毎年二月に執行する神事能。◎夜中薪を焚きてする故の名。

たきぎこる　（枕）　薪こる鎌倉山の」　○萬葉「たきぎこる鎌倉山の」

だきう　打毬（名）　古代遊戯の名。騎馬にて毬を投げ競爭して之を取るもの。

だきうらく　打毬樂（名）　雅樂の曲名。中古競馬の後には之を奏するを習とす。

たぎし　（名）　船の舵の古名。

たきび　焚火（名）　燃やしたる火。

たきもとりう　瀧本流（名）　和樣書風の一派。八幡瀧本坊の創めたるもの。

たきもの　焚物（名）　薪に同じ。

たきもの　薫物（名）　香に同じ。

たきものあはせ　薫物合（名）　組を左右に分けて香の優劣を競爭する遊戯。

たきものひめ　薫物姫（名）　織女の異名。

たゆ　絶（自動下二段）　半にて止む。●無くなる。●切る〻。●とぎる〻。●中絶する。

たゆひ　手結（名）　手繩に同じ。

たゆたに　（副）　たゆたふ有樣。（萬葉）

たゆたふ　（自動四段）　ゆらめく。●たゆとひて進み かぬる。●躊躇する。○萬葉「大船のたゆたふ海に」

たゆたに　（副）　たゆたにに同じ。（萬葉）

たゆらに　弛（他動下二段）　たゆましむる。

たゆむ　弛（自動四段）　心の弛む。●怠る。●油斷する。

たゆみ　（名）　たゆむ事。●油斷。

たゆし　（形。形狀言ク活）　〔一〕だるし。……身體に云ふ。○相摸集「手もたゆくならす扇の置きどころ忘るばかりに秋風ぞ吹く」〔二〕にぶし。……心に云ふ。○源氏「あやしくたゆく愚なる本性にて」

ため　爲（名）　〔一〕其物事の利分になる料。○「國のため思ふ」「是も身のためにあらず」〔二〕其物事の目的を達する最良手段。○「月見んための舟遊び」「子を育つるための親の苦勞」

ため　溜（名）　〔一〕溜め置く事。●溜め置く所。〔二〕特には德川時代に病人の犯罪を入れ置く獄。

ため　（名）　卜の詞。とほかみゑみためを見よ。○袖中抄師時「思ひかね龜のまうちにことをへば

ため　爲(副)　〔一〕關して。○「御身のため師なるべし」ためあひたりときくがうれしさ」　〔二〕所以にて。●原因にて。●ゆかりにて。○「一人のため萬民利害を感ず」……(又)—ために。(形)—ための。

だめ　(名)　圍碁の詞。雙方どちらの得分にもならぬ無益の地面。

ためいき　溜息(名)　溜め置きて一度に吐く息。嘆息する時などにする事。●といき。●大息。

ためぬり　溜塗(名)　漆塗の一法。赤みを帶びたる黑色に塗る事。

ためつもの　味物(名)　美味の食物。(記)

ためらふ　(自動四段)　たゆたふ。●躊躇する。●猶豫する。

ためし　例(名)　前に有りて見本となる事實。●先例。●前例。

ためし　驗(名)　ためす事。●こゝろみ。●試驗。

ためす　驗(他動四段)　こゝろむる。●試驗する。●してみる。

たみ　民(名)　〔一〕人民。〔二〕農夫。●百姓。

たみぞ　田溝(名)　田の間の溝。●用水堀。(和名抄)

たみのつかさ　民部省(名)　みんぶしやうに同じ。(和名抄)

たみくさ　民草(名)　人民の多く生長するを草に喩へて云ふ詞。

たみごゑ　(名)　濁りたる音聲。

たじ　多事(名)　事の多きこと。●多忙。●多端。

たじだし　他事(名)　他の事柄。●外の事。

山車(名)　祭禮の時飾り立てゝ引きあるく一種の車。

たじろく　(自動四段)　立退くの畧。◎あとしさりする。●しりごみする。

たしに　(副)　たしかに。●屹度。(記)

だしぬく　出抜(他動四段)　人の不意を打つ。●油斷させて俄に驚かす。

だしぬけに　出抜に(副)　不意に。●突然に。

たしか　慥。確(名)　しっかりと定まりたる事。●確實。●必定。△、形)—慥なる。(副)—慥に。

たしょ　他所(名)　外の場所。●旅行地。

たしやう　他生(名)　佛教にて過去、現在、未來の三界をおの〳〵生と稱へ現在を本として過去もしくは未來の世を他生と稱ふ。「他生の緣」

とは前世よりの契の現世にて其結果を顯はすを云ふなり。

たじゃうう　多情(名)　〔一〕詩歌的の興味ある事。〔二〕移り氣なる事。❸うはき。

だじゃうにふだう　太政入道(名)　太政大臣の入道せし人の稱。

だじゃうだいじん　太政大臣(名)　太政官の長官にて天下の政務を總理するの役。職原抄に「一人(天皇の御事)に師範として四海に儀形たり。其人無き時は則ち闕く。故に則闕の官と云ふ。有德の撰なるが故に其人に非されば常に之に任ぜず」と見ゆ。❸おほいまつりごとのおほいまうちきみ。

たじゃうくわん　太政官(名)　天下の政務を統べ行ふ官廳の名。官吏は太政大臣、左大臣、右大臣、大納言、中納言、參議、外記、辨、史、史生、官掌あり。❸おほいまつりごとのつかさ。❸おほまつりごとのつかさ。

だじゃうぐわん　太政官(名)　だじゃうくわんの古代の稱へ。

だじゃうくわう　太上皇(名)　太上天皇に同じ。

だじゃうてんわう　太上天皇(名)　天皇御讓位ありて後。朝廷より奉らしめ給ふ尊號。❸おほみおやのすめらみこと。

たじたじ　(副)　たじろく有樣。

たしだしに　(副)　たしにに同じ。たしかに。(記)

たじつ　他日(名)　後日。❸近日。

たしなむ　嗜(他動四段)　〔一〕すく。❸好む。❸嗜好する。〔二〕心懸くる。

たしなむ　嗜(他動下二段)　艱ます。❸苦しむる。

たしなむ　嗜(自動四段)　苦しむ。❸困難する。(紀)

たしなみ　嗜(名)　〔一〕すき。❸嗜好。〔二〕心懸。

たしらか　嗜(名)　苦しみ。❸困難。(紀)

たしむ　(名)　水を盛る上古の土器。

たじく　嗜(他動四段)　たしなむに同じ。

たしまへ　懦弱(名)　意志の力の乏しき事。❸勇力の少なき事。❸柔弱。△(形)—懦弱なる。(副)—懦弱に。

だしぎぬ　足前(名)　足らぬだけ補ふ事。❸補足。

たしゅつ　出衣(名)　いだしぎぬに同じ。

他出(名)　他所に出で行く事。❸他行。△(動)—他出す。

たしゅう 他宗(名) 外の宗門。
たしなみ 嗜(名) たしなみに同じ。
たび 旅(名) 〔一〕我住む境を離れて行く事。●家を出で遠くに在る事。●旅行。〔二〕古は同じ境の内にても我家を離れて泊る處をば旅といへり。
たび 足袋(名) 足に履く袋。
たび 度(名) ど。●回。●返。●時。●折。
たび 茶毗(名) たびに同じ。
だび 茶毗(名) 梵語より來る。◎火葬。
たびゐ 旅居(名) 旅にて居る事。●旅の住居。○夫木「山里の君が旅居は鶯を人に聞かせん心なりけり」
たびいし 礫(名) 飛石の轉。◎つぶて。●小石。(靈異記)
たひばり 田雲雀(名) 鳥の名。雲雀の一種にて形小さく灰色なるもの。
たびと 田人(名) 田子に同じ。
たびと 旅人(名) たびびとの略。○紀「飯に飢てこやせる其たびとあはれ」
たびどころ 旅所(名) 旅行中の宿泊所。
たびぢ 旅地 旅行する道筋。●道中。(雅)
たびだち 旅立(名) 旅に出で立つ事。●出立。●門出。●發足。
たびたまふ (他動四段) たびは賜ひに同じ。之に敬語の助動詞を添へたるもの。=たゞ賜ふといふに同じ。○謠曲「亡き跡とひてたび給へ」
たびたび 度々(副) 毎度。●毎々。●しば〳〵。
たびそう 旅僧(名) 旅行中の僧。
たびづと 旅土產(名) 旅よりの土產。(雅)
たびね 旅寢(名) 旅にて寢る事。
たびらこ 田平子(名) 土黐菜(かはらけな)の一名。春の七草の一つ。
だびらひろ (名) 身の幅の廣き太刀。●だんびら。○太平記「七尺三寸の太刀だびらひろに造りたるを」
たびうど 旅人(名) たびゞとに同じ。
たびやかた 旅舘(名) 旅宿。●宿屋。○月詣集「霜枯の草ひきむすぶ旅舘時雨もる夜は臥しぞわづらふ」
たびまくら 旅枕(名) 旅寢にてする枕。(雅)
たびごろも 旅衣(名) 旅人の着て居る衣。(歌詞)

たびごろも　旅衣（枕）　旅の歌にて衣に縁あるひもうらぼろのなどにかけたる枕詞。

たびみち　旅路（名）　たびぢに同じ。○和泉式部集「都いで〜行く旅みちの遠きなりけり」

たびみや　旅宮（名）　たびしょに同じ。

たびしかばら　（名）　極めて下賤の人。◎一説には石瓦といふ意にて人間の數にも入らぬの意。一説にはたびしは茶毘師にて火葬人。かばらは皮取にて穢多の意。（雅）

たびし　旅所（名）　神社より神輿を渡して暫く假に安置する所。●假宮。●御旅所。●旅宮。

たびびと　旅人（名）　旅行中の人。●旅客。

たびずみ　旅住（名）　旅にて住む事。●旅の住居。●旅居。○夫木「あばれなる春の曙今朝立ちぬ霞の底や暮の旅住」

たも　（名）　魚をすくふ網の類。○散木「篝火の火影を見ればまずらをぼたももいとなく鯉子くむらし」

だも　（後）　だにもの中略。◎さへ。●だけにても。

たもと　袂（名）　袖の下の方。

たもとだすき　袂襷（名）　袂を後にやりて襷のやうに結び合はする事。小兒などのする事。

たもとほる　（自動四段）　立ちもとほるの略。◎立ち回る。●まほる。●めぐる。●あちこちとぶらつく。（萬葉）

たもどご　（名）　稲の異名。○散木「山里はいてゐ〜このめるたもどごに風そよめきて袖しをるなり」

たもり　田守（名）　田の番人。（雅）

たもつ　保（他動四段）　（一）我物として持つ。●所有する。（二）長く所有する。●保有する。

たもつ　保（自動四段）　永く存する。●永續する。●保存する。●維持する。

たもん　多聞（名）　（一）多聞天の略。（二）長屋作りにしたる城の周壁の講へ。◎松永久秀の大和多聞山に城を築きし時の構造に擬したる故の名。

たもんでん　多聞天（名）　毘沙門天の一名。（佛教）

たせい　多勢（名）　大勢。●多人數。

たぜり　田芹（名）　田に生ずる芹。

たす　足（他動四段）　足らしむる。●添ふる。●加ふる。

だす　出（他動四段）　いだすに同じ。

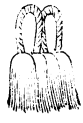
たすかる 助(自動四段) 助けらるゝ。●救はるゝ。●死ぬべき命を生くる。●災害にかかるべきを免かるゝ。

たすう 多數(名) 數の多き事。△(形)—多數の。

たすく (他動四段) 襷にして掛くる。○枕「いみじう肥ゐたる兒の二つばかりなるが白う美しきが二藍の薄物など衣ながくてたすきあげたるが」

たすく 助(他動下二段) 〔一〕手傳ふ。●助力する。●加勢する。〔二〕危害より救ひ出す。●救助する。

たすけ 手助。總(名) 馬具の名。轡に添へて裝飾に附くる總。(ふさ)〔圖〕



たすけ 助(名) 助力。●補助。●加勢。●救助。

たすけのほね (名) あばらぼね。●肋骨。(和名抄)

たすけぶね 助船(名) 溺るゝ人を救助する船。

たすけことば 助辭(名) 文法上の詞。語勢、口調、意味の強弱などを助くるために置くもの。「これはしも」の「しも」。「見てを歸らん」の「を」の字の類。

たすき 襷(名) 袖を括りあぐる紐。古のは頸より兩手に掛けて神前君前に食物を運ぶ人の用ひたるもの。今のは腕より脊に廻して行き違はせ勞働する婦人などの用ふるものとす。

たすきかくるどものを 襷懸伴緒(名) 襷を懸けて天皇の御給仕などに仕へ奉る女官一部屬の長。(祝詞式)